




# 医学部附属医院

---

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院薬剤部・教授   |  |
| 氏名     | 伊東 弘樹 (Ito Hiroki)  |   |
| 取得学位   | 博士(薬学)、熊本大学、2004年1月   |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 医療薬学、臨床薬理学  |
| 研究キーワード       | 生理活性ペプチド、バイオマーカー、MR-proADM、AcSDKP、抗菌薬適正使用   |
| 研究内容          | <p>1. MR-proADM濃度と腎不全時の降圧治療抵抗性および脂質異常症との関連性に関する研究</p> <p>酵素免疫測定法および質量分析法を用いた血漿中MR-proADMの高感度測定法を開発し、慢性腎不全患者の血漿中MR-proADM濃度は健常人と比較して有意に高いことを示した。また、その濃度は生体腎移植後に急激に低下することを明らかとした。慢性腎不全患者において、降圧治療抵抗性と血漿中MR-proADM濃度の間に有意な正の相関が認められることを示し、MR-proADM濃度と脂質異常症との関連性を明らかとした。さらに、健常人における検討において、MR-proADM濃度は血管不全を反映する鋭敏なバイオマーカーであることを示した。</p> <p>2. N-acetyl-seryl-aspartyl-lysyl-proline (AcSDKP) 濃度と腎性貧血との関連性に関する研究</p> <p>酵素免疫測定法による血漿中AcSDKPの高感度測定法を開発し、慢性腎不全患者の血漿中AcSDKP濃度は健常人と比較して有意に高いことを示した。また、その濃度は生体腎移植後に急激に低下することを明らかとした。さらに、慢性腎不全患者において、腎性貧血の合併の有無で、血漿中AcSDKP濃度に有意な違いが認められることを明らかとした。</p> <p>3. 抗感染症薬の適正使用（薬物動態および治療薬物モニタリング）に関する研究</p> <p>発熱性好中球減少時におけるバンコマイシンおよびテイコブラニンの至適血中濃度を明らかとした。ポリコナゾールはCYP2C19遺伝子多型に基づく減量により、有効血中濃度到達率が高いこと、高濃度の持続時間が高いと肝障害の発症頻度が高いことを明らかとした。イトラコナゾールは活性代謝物の遊離型分率の方が低く、有効性と関連している可能性および未変化体の遊離型濃度が有害事象と関連している可能性を示した。ドリペネムおよびポリコナゾールの特殊病態下における薬物動態特性を明らかとした。さらに、多くの広域抗菌薬の高感度同時定量法を開発し、治療薬物モニタリングに応用可能であることを確認した。</p>  |
| 研究業績・アピールポイント | <ol style="list-style-type: none"> <li>Koyama T, Kuriyama N, Suzuki Y, Saito S, Tanaka R, Iwao M, Tanaka M, Ito H, et al. Sci Rep, 11, 305, 2021.</li> <li>Iwao M, Suzuki Y, Tanaka R, Koyama T, Ozaki E, Nakata T, Aoki K, Fukuda A, Sato Y, Kuriyama N, Fukunaga N, Sato F, Katagiri F, Ohno K, Shibata H, Mimata H, Ito H. J Pharm Biomed Anal, 183, 113168, 2020.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka T, Tanaka R, Sato Y, Mimata H, Ito H. Clin Chim Acta, 453, 160-163, 2015.</li> <li>Suzuki Y, Ito H, et al. Peptides, 48, 45-48, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Ito H, et al. Peptides, 43, 102-104, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Ito H, et al. J Pept Sci, 19, 59-63, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka K, Sato Y, Fujioka T, Sato Y, Mimata H, Ito H. Clin Lab., 62, 1323-1328, 2016.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka K, Sato Y, Fujioka T, Sato Y, Mimata H, Ito H. Biol Pharm Bull, 37, 1075-1079, 2014.</li> <li>Suzuki Y, Ito H, et al. J Pept Sci, 18, 276-281, 2012.</li> </ol> |

|               |  |   |
|---------------|--|---|
| 所属・職位         | 医学部附属病院医療情報部・教授  |  |
| 氏名            | 下村 剛 (Shimomura Tsuyoshi)  |   |
| 取得学位          | 博士 (医学)、大分大学、2008年6月   |   |
| SDGs目標        |   |   |
| 研究分野          | 医療情報、救急領域のICT、MRI、災害医療   |   |
| 研究キーワード       | 医療情報ネットワーク、遠隔画像伝送システム、fMRI、MRS、災害医療  |   |
| 研究内容          | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 医療情報ネットワーク：「うすき石仏ねっと」と総務省の提唱するクラウド型高度化EHR事業に参画し成果を上げている。また、このシステムを発展させて、おおいた医療ネットワークを現在構築中である。(論文1)</li> <li>● 救急領域のICT：平成26年に大分県遠隔画像伝送システムを立ち上げ、平成29年には12誘導心電図伝送システム追加した。 unnecessary 搬送の回避やDoor-to-balloon timeの短縮などの成果を上げている。令和3～4年にかけてシステム更新を行い、大分県下全消防本部とほぼすべての救急病院が参加する全国に例のないクラウド統合型救急支援システムを完成させる。(論文2) また、医療関係者間コミュニケーションアプリJoinを県下に導入して運営協議会を立ち上げ運営して、 unnecessary 転院搬送の回避などで成果を上げている。</li> <li>● MRIを用いた研究：MRIを用いたfMRI、MRS、GABA、DTI等の手法を用いた解析を行う技術を習得している。これらの解析方法を駆使して脳神経外科、精神科領域において様々な成果を上げている。令和3年よりヘルスケアAIデータサイエンス講座教授も兼務しており、AIを用いたデータ解析へと発展させていく。(論文3、4)</li> <li>● 災害医療：大分大学災害対応研修の開催、BCP・BCMの策定を行っている。DMAT、医療救護班、災害医療コーディネーターとして、実災害で活動している。</li> </ul> <p>様々な領域におけるICTの統合：医療情報、救急領域、MRI、災害医療等の幅広い領域で中心的役割を担っておりそこで得られた知見を基にICTの統合を目指している</p> |   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平成30年、ID-Linkを利用したクラウド型高度化EHR事業と大分大学医学部附属病院との連携について. 第38回医療情報学連合大会プログラム・抄録集 307</li> <li>2. 令和元年、遠隔画像伝送システムへのクラウド心電図機能の統合—地域中核病院参画による遠隔地への unnecessary 搬送の回避—. 日本臨床救急医学会雑誌 2019年 22巻 5号 p. 671-679</li> <li>3. 令和3年、Perfusion Parameter Obtained on 3-Tesla Magnetic Resonance Imaging and the Ki-67 Labeling Index Predict the Overall Survival of Glioblastoma. World Neurosurg. 2021 May;149:e469-e480.</li> <li>4. 平成20年、Functional brain mapping during recitation of Buddhist scriptures and repetition of the Namu Amida Butsu: a study in experienced Japanese monks. Turk Neurosurg. 2008 Apr;18(2):134-41.</li> </ol>  |   |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院



理工学部




福祉健康科学部

その他学内施設等





|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院長・教授   |  |
| 氏名     | 三股 浩光 (Mimata Hiromitsu)  |   |
| 取得学位   | 医学博士、大分医科大学、1988年3月   |   |
| SDGs目標 |   |   |



|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 泌尿器科学   |
| 研究キーワード       | 排尿機能、低侵襲手術、前立腺癌   |
| 研究内容          | <p>1 外尿道括約筋再生による尿失禁治療法の開発<br/>         外尿道括約筋は尿失禁を防止する横紋筋であるが、加齢に伴って減少し、高齢者の尿失禁の原因の一つと考えられている。我々はヒト外尿道括約筋幹細胞を分離培養し、不死化細胞株を樹立して、各種サイトカインのシグナル伝達機構を明らかにしてきた。増殖因子のHGFとIGF-IIはそれぞれMAPK経路とPI3-K経路を活性化して増殖と分化を促進し、Myostatinはsmad-2をリン酸化して増殖を阻害すること、またTNF-<math>\alpha</math>はcaspase3を活性化してアポトーシスを誘導することを明らかにした。</p> <p>2 低酸素環境における前立腺癌細胞のアンドロゲン非依存性獲得機序の解明<br/>         アンドロゲン除去にて前立腺癌細胞はアポトーシスを誘導して細胞死に陥るが、同時に前立腺組織では微小血管が減少して、組織内低酸素状態となる。われわれは長期低酸素状態が、ヒト前立腺癌細胞のアンドロゲン非依存性や増殖能・浸潤能を亢進することを見出し、その機序としてvav3やangiopoietin-like protein-2、ephrin-B1が関与することを明らかにした。</p> <p>3 泌尿器科領域の低侵襲手術の開発<br/>         本邦で初めて単孔式ドナー腎採取術を施行し、泌尿器科領域における単孔式腹腔鏡手術やReduced Port Surgeryの新規術式を開発してきた。</p>  |
| 研究業績・アピールポイント | <p>① <u>Growth mechanism of satellite cells in human urethral rhabdosphincter.</u><br/> <b>Sumino Y</b>, et al. Neurourol Urodyn. 2007;26(4):552-561.</p> <p>② <u>Growth inhibition and apoptosis induction by tumor necrosis factor-<math>\alpha</math> in human urethral rhabdosphincter satellite cells.</u> Hanada M, <b>et al.</b> J Urol. 2010 Jun;183(6):2445-50.</p> <p>③ <u>Regenerative medicine as a new therapeutic strategy for lower urinary tract dysfunction.</u><br/> <b>Sumino Y, Mimata H.</b> Int J Urol. 2013 Jul;20(7):670-5.</p> <p>④ <u>Chronic hypoxia induces androgen-independent and invasive behavior in LNCaP human <b>prostate cancer</b> cells.</u> Yamasaki M, et al. Urol Oncol. 2013 Oct;31(7):1124-31.</p> <p>⑤ <u>Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of <b>prostate cancer</b> cells by activating expression of ephrin-B1.</u> Iwasaki K, et al. Cancer Sci. 2018 Oct;109(10):3159-3170.</p> <p>⑥ <u>Angiopoietin-like protein 2 induces androgen-independent and malignant behavior in human <b>prostate cancer</b> cells.</u> Sato R, et al. Oncol Rep. 2015 Jan;33(1):58-66.</p> <p>⑦ <u>Laparoendoscopic single-site surgeries: A multicenter experience of 469 cases in Japan.</u><br/>         Sato F, et al. Int J Urol. 2017 Jan;24(1):69-74.</p> <p>⑧ <u>Patient-reported postoperative pain, body image, and cosmetic satisfaction after transumbilical laparoendoscopic single-site adrenalectomy.</u><br/>         Nomura T, et al. Asian J Endosc Surg. 2017;10(3):289-294.</p> <p>⑨ <u>Laparoscopic ileal ureteral replacement to preserve the natural anti-reflux system: An initial case report.</u> Shinohara M, et al. IJU Case Rep. 2021;4(3):132-135.</p> <p>⑩ <u>"Early-pull-out" technique for intracorporeal ileal conduit urinary diversion after robot-assisted radical cystectomy.</u> Shin T, Mimata H. Int J Urol. 2021 Jul;28(7):778-779.</p> |

|               |  |   |
|---------------|--|---|
| 所属・職位         | 医学部附属病院医療情報部・准教授   |  |
| 氏名            | 安徳 恭彰 (Antoku Yasuaki)   |   |
| 取得学位          | 博士 (芸術工学)、九州大学、2013年3月   |   |
| SDGs目標        |      |   |
| 研究分野          | 医療情報、遠隔医療、学習支援   |   |
| 研究キーワード       | 遠隔診断治療システム、医療情報、学習管理システム   |   |
| 研究内容          | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 遠隔医療：テレビ会議システムを利用した遠隔医療教育への応用への研究<br/>遠隔診療の普及に向けた、カメラによる画像認識や映像評価に関する研究。医療機器をネットワーク接続するのは患者の負担になるため、カメラに映った医療機器のデータを画像解析で自動的に読み込むことで患者負担を軽減するための研究（論文1）</li> <li>● 医療情報：臨床データ収集におけるシステム開発<br/>臨床データにおけるデータ収集システムの構築をおこない、データ収集の効率化、および収集データの精度向上を行っている（論文2）</li> <li>● 遠隔医療教育における人材育成<br/>国内外における国際遠隔医療教育における技術者育成事業。技術者のスキルレベル向上のための教科書作成、および研修プログラムの構築、その評価基準の作成など。国を超えた遠隔医療エンジニアの育成に係る技術的研究。（発表1）（著書1、2）</li> <li>● 学生のキャンパス内でのPC環境改善に係る研究<br/>学内で運用している貸し出しノートパソコンのシステム改修による効果検証。システム構築による24時間無人運用。無人による無断利用、期限無視などの問題をシステム改修により改善。（発表2）</li> <li>● 院内における各種データに関する調査・解析<br/>IRセンターにおいて、学生の成績データをもとに学生の学習効率の調査・解析を行なっている。入学時の成績が卒業時の成績にどの程度影響しているかなど教育効果の検証にもつながっている。</li> </ul>  |   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和3年、遠隔医療における医療機器の画像認識に関する研究, 第41回医療情報学連合大会論文集, p 878-879, 2021</li> <li>2. 令和3年、Predictive factors of non-treatment and non-persistence to osteoporosis medication after fragility hip fractures at 3 years after discharge:a multicentre,prospective cohort study in the northern kyushu district of Japan, Archives of Osteoporosis(2021)16:132</li> </ol> <p>発表</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和3年、Developing Evaluation Criteria for Engineering Training Programs in Remote Medical Education in Asia、IEEE TALE 2021, 2021.12.</li> <li>2. 令和2年、ノートパソコンの無人貸出返却システムの改修、AXIES2020年次大会</li> </ol> <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和2年、新版医療情報第6版 医療情報システム編、2章3節「遠隔医療システム」p.52-58</li> <li>2. 平成28年、遠隔医療カンファレンス 技術担当者になったら読む本～入門編～、編集</li> </ol> |   |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院手術部・准教授  |  |
| 氏名     | 新宮 千尋 (Shingu Chihiro)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2010年9月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 周術期医学  |
| 研究キーワード       | スピンメタボロミクス、周術期管理、医療経済  |
| 研究内容          | <p>本研究は、NMRメタボロミクスとESRメタボロミクス（スピンメタボロミクス）により、周術期の合併症を予測、また発生時の病態の把握を行うための技術を確立することを目的としている。</p> <p>国家予算やGDPに対する医療費の割合の増加は年々増すばかりで、今後の加速する高齢化社会を考慮すると、逼迫した問題である。また、本国も米国並みの訴訟社会へと変貌してきており、手術の結果が少しでも患者や患者家族の意図にそぐわないものであると、医師が訴訟に巻き込まれる危険性も年々増加してきており、そのためにも手術前の患者の術前検査を簡単に省略できない状況にある。以上の状況より、NMRメタボロミクスとESRメタボロミクスを組み合わせたスピンメタボロミクスの測定系を確立することにより、周術期合併症をきたした患者と、経過に問題のなかった患者から採取した検体との比較・検討を経時的に行うことで、手術侵襲に伴う代謝物やフリーラジカルの変化を、網羅的に解析し、明らかにすることにより、周術期合併症の予測の基盤を築き、人的や財政的な医療資源の節約に貢献することを目的としている。</p> <p>現在のところ、健常人の血液と尿のサンプルの分析は、順調に進み、スピンメタボロミクスの正常パターンの傾向は概ね把握することに成功したため、合併症を有する術前患者における血液と尿のサンプルの採取に取りかかっている。</p> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 20K09200、2020-2022) 研究代表者<br/>周術期合併症に関する予測因子の基礎的検討-スピンメタボロミクスの臨床</p> <p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 15K10539、2015-2017) 研究代表者<br/>スピンメタボロミクスに関する基礎的検討および臨床応用</p> <p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 20591808、2008-2010) 研究代表者<br/>脳低体温療法施行時の患者重症度に関する研究-電子スピン共鳴法を用いた検討</p>   |



|               |   |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
|---------------|---|---|--------|--|---------|----------------|---------|---|---------|---------------------------|---------|---|---------|------------------|----------|--|--------|--------------------|
| 所属・職位         | 医学部附属病院リハビリテーション部・准教授   |  |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 氏名            | 田仲 和宏 (Tanaka Kazuhiro)   |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 取得学位          | 博士 (医学)、九州大学、1995年3月  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| SDGs目標        |      |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 研究分野          | 骨軟部腫瘍学、整形外科学  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 研究キーワード       | 骨軟部腫瘍・肉腫、臨床試験、融合遺伝子、染色体転座、分子標的治療  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 研究内容          | <p><b>臨床的研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本医療研究開発機構 (AMED) 革新的がん医療実用化研究事業<br/>進行軟部肉腫に対する二次治療における標準治療の開発のための研究：研究代表者</li> <li>● Japan Clinical Oncology Group (JCOG)：骨軟部腫瘍グループ事務局</li> <li>● 高悪性度非円形細胞肉腫に対する補助化学療法のランダム化第III相試験 (JCOG2102)：研究代表者</li> <li>● 進行軟部肉腫に対する二次治療のランダム化第II相試験 (JCOG1802)：研究代表者</li> <li>● 高悪性度非円形細胞肉腫に対する補助化学療法のランダム化第II/III相試験 (JCOG1306)：研究事務局</li> <li>● 高悪性度非円形細胞軟部肉腫に対する術前術後補助化学療法の第II相試験 (JCOG0304)：研究事務局</li> </ul> <p><b>基礎的研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究(C)<br/>ゲノム編集によるsyngeneic系を用いた(肉腫型)転座発がんのメカニズム解明：研究代表者</li> <li>● 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究(B)<br/>多層的遺伝子解析を用いた高悪性度軟部肉腫に対する個別化医療の開発：分担研究者</li> </ul>   |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 研究業績・アピールポイント | <p><b>研究業績</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Tanaka K</b>, Machida R, Kawai A, et al. Perioperative Adriamycin plus ifosfamide versus gemcitabine plus docetaxel for high-risk soft tissue sarcomas: Randomised, phase II/III study-JCOG1306. <i>Br J Cancer</i>, in press, 2022.</li> <li>2. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. Surrogate endpoints for overall survival in randomized controlled trials of localized osteosarcoma: A meta-analytic evaluation. <i>Sci Rep</i> 10:8573, doi:10.1038/s41598-020-65591-z. 2020.</li> <li>3. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. A meta-analytic evaluation of the correlation between event-free survival and overall survival in randomized controlled trials of newly diagnosed Ewing sarcoma. <i>BMC Cancer</i> 20:379, doi:10.1186/s12885-020-06871-9. 2020.</li> <li>4. <b>Tanaka K</b>, Mizusawa J, Naka N, et al. Ten-year follow-up results of perioperative chemotherapy with doxorubicin and ifosfamide for high-risk soft tissue sarcomas in the extremities: Japan Clinical Oncology Group study JCOG0304. <i>BMC Cancer</i> 19:890, doi:10.1186/s12885-019-6114-2. 2019.</li> <li>5. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. A meta-analysis of randomized controlled trials that compare standard doxorubicin with other first-line chemotherapies for advanced/metastatic soft tissue sarcomas. <i>PLoS One</i> 14:e0210671, doi:10.1371/journal.pone.0210671. 2019.</li> <li>6. <b>Tanaka K</b>, Kawano M, Iwasaki T, et al. Surrogacy of intermediate endpoints for overall survival in randomized controlled trials of first-line treatment for advanced soft tissue sarcomas in the pre- and postpazopanib era: A meta-analytic evaluation. <i>BMC Cancer</i> 19:56, doi:10.1186/s12885-019-5268-2. 2019.</li> </ol> <p><b>受賞歴</b></p> <table border="0"> <tr> <td>平成8年7月</td> <td>文部省在外研究員 (米国National Institutes of Health留学)</td> </tr> <tr> <td>平成10年4月</td> <td>日本整形外科学会 学会奨励賞</td> </tr> <tr> <td>平成11年2月</td> <td>米国整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award</td> </tr> <tr> <td>平成12年4月</td> <td>整形災害外科学研究助成財団 ジンマージャパン奨励賞</td> </tr> <tr> <td>平成13年6月</td> <td>日米加欧整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award</td> </tr> <tr> <td>平成13年6月</td> <td>日本がん分子標的治療学会 奨励賞</td> </tr> <tr> <td>平成28年10月</td> <td>Japanese Journal of Clinical Oncology誌 Paper of the Year</td> </tr> <tr> <td>令和2年1月</td> <td>第6回運動器疾患論文学術賞 最優秀賞</td> </tr> </table> |   | 平成8年7月 | 文部省在外研究員 (米国National Institutes of Health留学) | 平成10年4月 | 日本整形外科学会 学会奨励賞 | 平成11年2月 | 米国整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award | 平成12年4月 | 整形災害外科学研究助成財団 ジンマージャパン奨励賞 | 平成13年6月 | 日米加欧整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award | 平成13年6月 | 日本がん分子標的治療学会 奨励賞 | 平成28年10月 | Japanese Journal of Clinical Oncology誌 Paper of the Year | 令和2年1月 | 第6回運動器疾患論文学術賞 最優秀賞 |
| 平成8年7月        | 文部省在外研究員 (米国National Institutes of Health留学)  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 平成10年4月       | 日本整形外科学会 学会奨励賞  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 平成11年2月       | 米国整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award   |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 平成12年4月       | 整形災害外科学研究助成財団 ジンマージャパン奨励賞   |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 平成13年6月       | 日米加欧整形外科基礎学会 New Investigator Recognition Award   |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 平成13年6月       | 日本がん分子標的治療学会 奨励賞  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 平成28年10月      | Japanese Journal of Clinical Oncology誌 Paper of the Year  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |
| 令和2年1月        | 第6回運動器疾患論文学術賞 最優秀賞  |   |        |  |         |                |         |   |         |                           |         |   |         |                  |          |  |        |                    |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院薬剤部・准教授  |  |
| 氏名     | 田中 遼大 (Tanaka Ryota)  |   |
| 取得学位   | 博士 (薬学)、熊本大学、2014年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |




|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 医療薬学、薬物動態学、臨床薬理学   |
| 研究キーワード       | 抗感染症薬、アルブミン、タンパク結合、薬物動態、特殊病態、ファーマコメトリクス  |
| 研究内容          | <p>●特殊病態における広域抗菌薬のPharmacometrics解析</p> <p>集中治療部 (ICU) 入室患者ではカルバペネム抗菌薬の血中濃度の個体差が大きく、一般病棟患者と異なる体内動態を示すことを明らかとした (論文1)。持続的腎代替療法 (CRRT) 施行の有無を考慮した母集団薬物動態解析を実施した結果、CRRTによるクリアランスを考慮した用法用量の調節の必要性を明らかとした (論文2)。経管投与時のポリコナゾールの吸着特性および薬物動態特性を明らかとした (論文3)。小児患者におけるバンコマイシンの薬物動態解析を実施した結果、発熱性好中球減少症時にはクリアランスが大きくなることで血中濃度が低値を示すこと、またその現象が幼児期で顕著であることを示した (論文4)。</p> <p>●広域抗菌・抗真菌薬の高感度同時測定系の開発とPK/PD解析への応用</p> <p>カルバペネム系抗菌薬、抗MRSA薬、ニューキノロン系抗菌薬、アゾール系抗真菌薬等のハイスループットな高感度同時定量法を新規に開発し、ICU患者や血液悪性疾患患者におけるPK/PD解析やTDM研究への臨床応用が可能であることを示した (論文5-7)</p> <p>●抗感染症薬の有害事象に関連した医療薬学研究</p> <p>リネゾリドの代表的な有害事象である血小板減少症と低ナトリウム血症の関連性を検討し、両因子のリスク因子を同定した (論文8-9)。</p> <p>●タンパク結合型抗微生物薬の遊離型分率変動要因解明とTDMへの応用</p> <p>イトラコナゾール及び活性代謝物の総・遊離型濃度の高感度同時定量法を確立し、生体内では活性代謝物の方が有効性に寄与している可能性を見出した (論文10, 11)。また、ダプトマイシンの総・遊離型濃度の同時定量法を確立し、腎不全時におけるタンパク結合率の変動要因を解明している (論文12, 13)</p>   |
| 研究業績・アピールポイント | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2017;40(8):1226-1231.</li> <li>2. Nonoshita K, Suzuki Y, Tanaka R, et al. Sci Rep. 2020 Dec 17;10(1):22148.</li> <li>3. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2021;44(5):737-741.</li> <li>4. Amano E, Tanaka R, et al. Ther Drug Monit. 2022, in press.</li> <li>5. Kai M, Tanaka R, et al. Clin. Biochem. 2021 Apr;90:40-49.</li> <li>6. Tanaka R, et al. J Pharm Biomed Anal. 2021 Feb 5;194:113764.</li> <li>7. Tanaka R, et al. Clin Biochem. 2022 Jan;99:87-96.</li> <li>8. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2016;39(12):1968-1973.</li> <li>9. Tanaka R, et al. J Clin Pharm Ther. 2021 Apr;46(2):343-351.</li> <li>10. Suzuki Y, Tanaka R, et al. Clinical Biochemistry. 50(18):1228-1236, 2017.</li> <li>11. Tanaka R, et al. Clin Case Rep. 2021 Jan 14;9(3):1187-1192.</li> <li>12. Tanaka R, et al. Clin Biochem. 2020 Jul;81:20-26.</li> <li>13. Tanaka R, et al. J Pharm Biomed Anal. 2019 Feb 20;165:56-64.</li> </ol> |





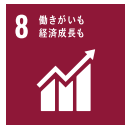
|               |  |   |
|---------------|--|---|
| 所属・職位         | 医学部附属病院病理診断科・病理部・准教授   |  |
| 氏名            | 西田 陽登 (Nishida Haruto)   |   |
| 取得学位          | 博士 (医学)、大分大学、2015年3月   |   |
| SDGs目標        |    |   |
| 研究分野          | 病理診断   |   |
| 研究キーワード       | 形態学、腫瘍、遺伝子、皮膚  |   |
| 研究内容          | <p><b>・皮膚扁平上皮癌における腫瘍免疫療法および分子標的薬の適応についての研究</b></p> <p>皮膚扁平上皮癌(SCC)に対して、次世代シーケンサー(NGS)を用いた遺伝子の解析を行うことで、腫瘍発生を遺伝子学的に解明し、さらに、免疫染色を行って、腫瘍免疫とのかかわりを合わせて検討している。対象としては、臨床・病理学的に転移巣を確認できている症例を14例、転移巣のない症例を14例、計28例とした。それぞれに対してiSeq Hotpanel (Illumina社)の対象となっている50遺伝子を検索し、腫瘍免疫とのかかわりを検索するために、PD-L1、CD8の免疫染色を行っている。</p> <p><b>・間質性肺炎関連肺癌に関わるタンパクおよび遺伝子の検索</b></p> <p>肺扁平上皮癌(SCC)は、以前は喫煙関連のものが圧倒的に多かったものの、近年では間質性肺炎に関連した扁平上皮癌が増加しつつある。そこで、肺SCCに対して、次世代シーケンサー(NGS)を用いた遺伝子解析を行い、腫瘍発生に関連した遺伝子の解明を進めている。さらに、免疫染色を行って発現タンパクを確認することで、発現遺伝子との関連を検討している。</p> <p><b>・子宮・卵巣腫瘍における免疫染色の反応性の比較・検討</b></p> <p>子宮・卵巣腫瘍は組織学的に多彩であるが、いずれにも共通して発生する腫瘍があり、代表的なものとして類内膜癌や明細胞癌がある。腫瘍の発生部位としては近いものの、それらの腫瘍についての異同の議論はなされていない。子宮・卵巣腫瘍の類内膜癌と明細胞癌に対して免疫染色にて発現タンパクを解析し、そのパターンにより組織学的な異同を検索するとともに、腫瘍発生や予後との関連を検討している。それによって予後と関連のあるタンパクの発見や新たな治療法の開発に結び付けたい。</p>                         |   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>Nishida H, Kondo Y, Kusaba T, Kadowaki H, Daa T. Immunohistochemical Reactivity of Prostate-Specific Membrane Antigen in Salivary Gland Tumors. Head Neck Pathol. 2021 Aug 21. Epub ahead of print.</p> <p>Goto K, Kukita Y, Honma K, Ogawa K, Nishida H, Takai T, Oishi T, Hishima T, Tanaka M, Isei T. Signet-ring cell/histiocytoid carcinoma of the axilla: a clinicopathological and genetic analysis of 11 cases, review of the literature, and comparison with potentially related tumours. Histopathology. 2021 Dec;79(6):926-939.</p> <p>Kawashima T, Umeno T, Terazawa T, Wada T, Shuto T, Nishida H, Anai H, Nakayama Y, Miyamoto S. Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model. Interact Cardiovasc Thorac Surg. 2021 May 27;32(6):969-977.</p> |   |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院卒後臨床研修センター・准教授   |  |
| 氏名     | 水上 一弘 (Mizukami Kazuhiro)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2013年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 消化器内科学  |
| 研究キーワード       | NSAIDs起因性小腸粘膜傷害、内視鏡診断・治療、アニサキス  |
| 研究内容          | <p>●NSAIDs起因性小腸粘膜傷害に関する研究<br/>カプセル内視鏡を用いて、健常人ボランティアにNSAIDsを内服してもらい、小腸粘膜傷害のできる頻度を検討し、さらに粘膜保護剤の併用によるNSAIDs起因性消化管粘膜傷害の予防効果などを検討した。</p> <p>●内視鏡診断に関する研究<br/>現在の消化器内視鏡は画像強調内視鏡や超音波内視鏡などを用いて、より精度の高い診断を追求しているが、とくに画像強調内視鏡に関する胃炎や胃癌診断の可能性を研究している。また最近ではArtificial Intelligence (AI) を搭載した大腸内視鏡検査に関する研究に着手しており、内視鏡専門医との病変検出能の比較や画像強調内視鏡との併用による診断効率の検討など、未来の消化器内視鏡検査のあるべき姿を模索している。</p> <p>●アニサキス症に関する病態解明<br/>アニサキス症を呈した患者から摘出したアニサキス虫体をおそらく世界で一番多く集めており、虫体側・宿主側の両面から、腹痛発生などのメカニズム解明を研究している。</p>   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>&lt;論文&gt;</p> <p>●Mizukami K, Murakami K, Abe T, Inoue K, Uchida M, Okimoto T, Kodama M, Fujioka T. Aspirin-induced small bowel injuries and the preventive effect of rebamipide. World J Gastroenterol 2011; 17 (46): 5117-22.</p> <p>●Mizukami K, Murakami K, Yamauchi M, Matsunari O, Ogawa R, Nakagawa Y, Okimoto T, Kodama M, Fujioka T. Evaluation of selective cyclooxygenase-2 inhibitor-induced small bowel injury: randomized cross-over study compared with loxoprofen in healthy subjects. Dig Endosc 2013; 25 (3): 288-94.</p> <p>●Mizukami K, Ogawa R, Okamoto K, Shuto M, Fukuda K, Sonoda A, Matsunari O, Hirashita Y, Okimoto T, Kodama M, Murakami K. Objective Endoscopic Analysis with Linked Color Imaging regarding Gastric Mucosal Atrophy: A Pilot Study. Gastroenterol Res Pract 2017; 2017: 5054237.</p> <p>●Hidano S, Mizukami K, Yahiro T, Shirakami K, Ito H, Ozaka S, Arika S, Saechue B, Dewayani A, Chalalai T, Soga Y, Goto M, Sonoda A, Ozaki T, Sachi N, Kamiyama N, Nishizono A, Murakami K, Kobayashi T. Analysis of the prevalence and species of Anisakis nematode in Sekisaba, Scomber japonicus caught in coastal waters off Saganoseki, Oita in Japan. Jpn J Infect Dis 2021;74 (5): 387-391.</p> <p>&lt;受賞&gt;</p> <p>2008年10月：ポスター優秀演題 (jddw2008)</p> <p>2013年10月：日本消化器内視鏡学会賞</p> <p>2014年5月：Poster of Distinction (DDW2014)</p> <p>2018年2月：Awards for Outstanding Reviewers (Internal Medicine)</p> <p>2019年1月：日本内科学会九州地方会指導医賞</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・講師   |  |
| 氏名     | 安藤 忠助 (Ando Tadasuke)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分医科大学、2006年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 腎不全治療学  |
| 研究キーワード       | 腎代替療法 (透析、腎移植)、生活の質 (QOL)   |
| 研究内容          | <p>生命維持に腎臓の機能が不足する状態を腎不全といい、私は腎不全の患者さんに腎代替療法を行っています。その際、透析患者さんや腎移植患者さんのQOLを改善するために泌尿器科的な介入を行う研究を行っています。具体的には、透析患者さんや腎移植患者さんの経過の中で、ある働きかけをすることでQOLが変化しうるかどうかを調べています。</p> <p>これらは患者さんに直結する、貴重な臨床研究と考えて取り組んでいます。</p> <p>現在、県内の基幹病院および多職種で連携・協力し、下記3つの研究を行っています。</p> <p>I 腎不全患者さんは男性ホルモン分泌能が低下し、男性更年期になりやすく、QOLが悪化します。したがって若い透析患者さんも男性更年期の状態でのQOLが悪化しているかを調査中です。</p> <p>II 腎不全患者さんは、腎移植によって腎不全状態から脱却します。したがって、腎移植前の男性更年期状態とQOLの悪化も腎移植によって改善するかどうかを調査中です。</p> <p>III 新型コロナウイルス感染症の流行前後で生活様式が変化し、透析患者さんの外食の頻度が変わった可能性があります。外食の頻度の変化と透析患者さんの血液データの変化について解析し、新型コロナウイルス感染症の流行が透析患者さんへ与える間接的な影響について調査中です。</p> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>① 透析患者さんはほとんど尿が出ないにもかかわらず、排尿に関する悩みでQOLが低下していることを解明し、排尿の改善によってQOLが改善する可能性があることについて論文化しました。Ando et al. Lower urinary tract symptoms impair the quality of life in maintenance hemodialysis patients. Renal Replacement Therapy (2019) 5:35 <a href="https://doi.org/10.1186/s41100-019-0230-y">https://doi.org/10.1186/s41100-019-0230-y</a></p> <p>② 透析患者さんの食事指導は非常に複雑です。透析患者さんも高齢化し、分かりやすい食事指導が必要です。心臓病死予防という観点の適切な魚の摂取頻度について論文化中です。</p> <p>受賞<br/> 2013年：大分人工透析研究会 奨励賞<br/> 2014年：大分人工透析研究会 奨励賞、九州泌尿器科連合地方会学術集会 会長特別賞<br/> 2015年：大分人工透析研究会 奨励賞、西日本泌尿器科学会総会 学術奨励賞</p>                            |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院皮膚科・講師   |  |
| 氏名     | 石川 一志 (Ishikawa kazushi)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2011年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|      |      |
|------|------|
| 研究分野 | 皮膚科学 |
|------|------|

|         |                            |
|---------|----------------------------|
| 研究キーワード | 皮膚、皮膚悪性腫瘍、エピプラキン、プラキンファミリー |
|---------|----------------------------|

|      |   |
|------|---|
| 研究内容 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・創傷治癒過程におけるエピプラキンの役割</li> </ul> <p>エピプラキンはプラキンファミリーと呼ばれる細胞内分子群に属しており中間径フィラメントであるケラチンと結合すると考えられている。エピプラキン欠損マウスでは、創傷治癒過程で表皮細胞の移動速度が増し、創傷治癒が早くなることが示されていた。そこでエピプラキン欠損および野生型マウスを用いて、創傷治癒過程における形態学的変化の比較検討を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・エピプラキンと皮膚疾患との関連</li> </ul> <p>ヒトエピプラキンでは、Bドメインと呼ばれる繰り返し構造が13個とされており、マウスでは16個とされていた (Fujiwara 2001, Spazierer 2003)。しかし以前から表皮抽出物や、培養細胞において、分子量の異なる蛋白質バンドが2本見られることがあった (Fujiwara 1992, Jang 2005, Tsuchisaka 2016)。このエピプラキンの遺伝子の多様性が、エピプラキンの分子の多様性の原因になっているか否か、およびその生物学的・医学的意義について、特に皮膚疾患との関連について検討したい。</p> |
|------|---|

|               |   |
|---------------|---|
| 研究業績・アピールポイント | <p>野生型マウスでの創の表皮細胞では核周囲に太いケラチン線維を認め、細胞間の空隙も比較的規則的であった一方、欠損型では強拡大でも太いケラチン線維を認めず、デスモソームにも細いケラチン線維を認めた。野生型の創傷治癒過程に認めるケラチンは、ケラチンが太くなることで細胞の弾性を増加させ、剪断応力に対する抵抗性を増加させていると考えられる。同時期のエピプラキン欠損細胞は断面積が有意に小さくなるが、太いケラチン線維を形成できない為、応力に抗しきれず細胞が小さくなるのではないかと考えられ、エピプラキンはin vivoにおいて、創傷治癒過程の表皮細胞で、ケラチンの側方会合を促進することが明らかになり、エピプラキンは創傷治癒過程において表皮細胞の移動に影響を与えることが推察された。</p> <p>Ishikawa K,et.al. : Epiplakin accelerates the lateral organization of keratin filaments during wound healing. J Dermatol Sci. 2010;60(2):95-104</p> |
|---------------|---|

|               |   |   |
|---------------|---|---|
| 所属・職位         | 医学部附属病院整形外科・講師  |  |
| 氏名            | 糸永 一郎 (Itonaga Itiro)   |   |
| 取得学位          | 博士 (医学)、大分医科大学、1997年3月  |   |
| SDGs目標        |      |   |
| 研究分野          | 整形外科  |   |
| 研究キーワード       | 関節リウマチ、骨軟部腫瘍  |   |
| 研究内容          | <p>●関節リウマチにおける骨破壊に関する研究</p> <p>関節リウマチにおける関節炎と関節破壊の機序において、特に関節滑膜でのサイトカインと破骨細胞形成および活性化による骨破壊のメカニズムについて研究する。</p> <p>●腫瘍における骨破壊に関する研究</p> <p>骨に発生する腫瘍による骨破壊機序を解明するため、腫瘍組織に存在する破骨細胞の特徴を調べ、破骨細胞形成に関与する腫瘍細胞の影響について研究する。</p> <p>関連リンク：<a href="https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000010295181/">https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000010295181/</a></p>   |   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>●論文</p> <p><u>Rheumatoid arthritis synovial macrophage-osteoclast differentiation is osteoprotegerin ligand-dependent.</u><br/>Itonaga I, Fujikawa Y, Sabokbar A, Murray DW, Athanasou NA. <i>J Pathol.</i> 2000 Sep;192(1):97-104. doi: 10.1002/1096-9896(2000)9999:9999&lt;::AID-PATH672&gt;3.0.CO;2-W. PMID: 10951406</p> <p><u>Phenotypic characterization of mononuclear and multinucleated cells of giant cell reparative granuloma of small bones.</u><br/>Itonaga I, Schulze E, Burge PD, Gibbons CL, Ferguson D, Athanasou NA. <i>J Pathol.</i> 2002 Sep;198(1):30-6. doi: 10.1002/path.1184. PMID: 12210060</p> <p>●受賞</p> <p>1999年9月、British Orthopaedic Research Society, Best Poster Prize<br/>2001年3月、Girdlestone Scholarship<br/>2001年4月、日本リウマチ財団 欧州派遣研修医</p> |   |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院小児科・講師   |  |
| 氏名     | 井上 真紀 (Inoue Masanori)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2020年6月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 人類遺伝学、新生児学  |
| 研究キーワード       | 臨床遺伝学、周産期医学、先天代謝異常症、疾患モデル動物   |
| 研究内容          | <p>● 乳児肝不全症候群1型における病態分子機構の解明</p> <p>LARS1遺伝子の病的バリエーションにより発症する乳児肝不全症候群1型について、<i>larsb</i>遺伝子ノックアウトゼブラフィッシュを用いて解析し、その病態に過剰なオートファジーの亢進が関与することを報告した (論文1)。さらなる病態解明を目的とし、乳児肝不全症候群1型患者と同様のLARS1遺伝子点変異を導入したノックイン動物モデルを作製し解析を行っている。</p> <p>● 橋小脳低形成10型における病態分子機構の解明</p> <p>RNA代謝関連分子であるCLP1の異常により発症する橋小脳低形成10型について、ゼブラフィッシュを用いて解析し、RNA代謝異常により蓄積する複数のRNA断片の中から病的RNA断端を同定し報告した (論文2)。</p> <p>● 新生児感染症の網羅的検索と臨床症状との比較</p> <p>NICUに入院を要する新生児を対象に、一般的な感染症検査では同定困難な病原体について multiplex real-time PCR法を用いた新生児感染症の網羅的解析を行い、周産期の経過や臨床症状との関連について解析を実施している。</p>  |
| 研究業績・アピールポイント | <p>CRISPR/Cas9システムを独自に改変した作製法を用いて、本附属病院にて同定された小児希少遺伝性疾患と同様の病的バリエーションを有するノックイン動物モデルの作製を行い、病態分子機構の解析を実施している。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、Inoue M, et al. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <b>Scientific Reports</b>.</li> <li>2020年、Inoue M, et al. Tyrosine pre-transfer RNA fragments are linked to p53-dependent neuronal cell death via PKM2. <b>Biochem Biophys Res Commun</b>.</li> </ol> <p>●競争的研究助成金</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年度～2024年度、科研費若手研究「乳児肝不全症候群1型における乳児期重症化と発熱時増悪因子の解明 (課題番号：22K15947)」研究代表者</li> <li>2019年度～2021年度、科研費若手研究「遺伝性神経変性疾患に認めるtRNA由来small RNAの生理的・病理的意義の解明 (課題番号：19K17366)」研究代表者</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、第62回日本先天代謝異常学会学術集会 若手優秀演題賞 「ロイシルtRNA合成酵素欠損ゼブラフィッシュを用いた乳児肝不全症候群の病態解明」</li> </ol> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院消化器内科・講師   |  |
| 氏名     | 遠藤 美月 (Endo Mizuki)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2008年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 肝臓   |
| 研究キーワード       | ウイルス性肝炎 肝がん 肝線維化   |
| 研究内容          | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 肝炎ウイルス排除達成を目指した研究<br/>WHOは、2030年までに公衆衛生上の脅威としての肝炎ウイルス排除達成を目指すことを目標として掲げている。C型肝炎はウイルス排除薬の進歩により、治癒可能な疾患となったが、いまだ専門医受診に結びつかず治療までたどり着けない患者が存在する。病院で検査を行ったC型肝炎ウイルス抗体陽性者を確実に拾い上げ、専門医受診につなげるシステムを構築しその効果を検討した。</li> <li>● 肝癌治療に関する研究<br/>切除不能な肝細胞癌に対する治療薬が続々と登場している。分子標的薬であるレンバチニブは奏効率が高く有効な治療であるが、副作用により中止・減薬されることも稀ではない。レンバチニブの副作用の一つに血小板減少があるが、レンバチニブの血中濃度が血小板減少を予測しうるか研究した (論文1.) 検討の結果、Cmaxと血小板減少率に有意な相関を認め、Cmaxはレンバチニブによる初期の血小板減少の予測に有用であることを証明した。</li> <li>● 肝線維化に関する研究<br/>肝疾患患者の予後において、肝線維化進展度を評価することは非常に重要である。非侵襲的肝線維化診断であるFib4 index、超音波エラストグラフィに関して、生検診断と比較した診断能について検討した。またFib4 indexを用いた糖尿病患者の肝発がん高リスク群を囲い込みの検討を行った。</li> </ul> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>論文</p> <p>1. 2021年、Maximum Plasma Concentration of Lenvatinib Is Useful for Predicting Thrombocytopenia in Patients Treated for Hepatocellular Carcinoma. Endo M, Honda K, Saito T, Shiraiwa K, Sueshige Y, Tokumaru T, Iwao M, Tokoro M, Arakawa M, Tanaka R, Tatsuta R, Seike M, Itoh H, Murakami K. World J Oncol.</p> <p>著書</p> <p>1. 2019年、糖尿病合併NAFLD/NASH診療—糖尿病内科と肝臓内科の連携—肝臓内科サイドから—肝臓クリニカルアップデート (特集 NAFLD/NASH診療の諸問題).vol.5,No.2 183-187</p>  |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院消化器外科・講師   |  |
| 氏名     | 遠藤 裕一 (Endo Yuichi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2009年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 消化器外科学、肥満外科学、AI開発   |
| 研究キーワード       | 肥満外科の基礎と臨床、AIによる手術支援システム開発  |
| 研究内容          | <p><b>【肥満外科における基礎および臨床研究】</b></p> <p>①基礎研究：肥満外科手術では体重減少と同時に、糖尿病・高血圧、脂質代謝異常また脂肪肝などが高率に改善することが報告されている。当科はいままでに、ラット胃バンディングモデル、スリーブ状胃切除モデルおよびスリーブバイパスモデルを作成し、減量にともなうホルモン変化を測定し、報告してきた。最近では、脳内視床下部における満腹中枢に与える影響やコレシストキニンや短鎖脂肪酸への影響について研究している。</p> <p>②臨床研究：当科では腹腔鏡下調節性胃バンディング術 31例、腹腔鏡下スリーブ状胃切除 (LSG) を184例に行い (2022年2月末まで)、良好で安全な成績を報告している。わが国では一般的に行われている術前内視鏡検査の有用性や、LSG後の脂肪肝の改善率、またLSGの際に使用するステープラーの至適高および胃壁の厚さについて検討を行い、それぞれ論文化し報告している。最近では、術前減量が内臓脂肪に与える影響や、癌への影響について研究を行っている。</p> <p><b>【AIによる手術支援システム開発】</b></p> <p>腹腔鏡下胆嚢摘出術はわが国においては標準治療とされているが、重篤な合併症である胆道損傷が約1%の頻度で発生している。これらは解剖学的誤認が原因とされているため、誤認防止に有効とされるランドマーク (右図) をAIが術中にリアルタイムで教示することで、合併症が軽減されることが期待される。当科ではAIを使用した手術支援システム開発を胆嚢以外の胃・肝臓手術に応用するため、現在研究を続けている。</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px;"> <p>① Rouviere sulcus (RS)</p> <p>② Lower edge of liver S4</p> <p>③ Common bile duct (CBD)</p> <p>④ Cystic duct (CD)</p> </div> </div> |
| 研究業績・アピールポイント | <p><b>【肥満外科】</b></p> <p>Endo Y, Ohta M, Kawamura M, Fujinaga A, Nakanuma H, Watanabe K, Kawasaki T, Masuda T, Hirashita T, Inomata M. Gastric Wall Thickness and Linear Staple Height in Sleeve Gastrectomy in Japanese Patients with Obesity. <i>Obes Surg</i> <b>2022</b> Feb; 32(2): 349-354</p> <p>遠藤裕一、太田正之、猪股雅史. 日本における肥満外科手術の現状と展望. <i>医学のあゆみ</i> 274: 934-938, 2020.</p> <p><b>【AI関連】</b></p> <p>Tokuyasu T, Iwashita Y, Matsunobu Y, Kamiyama T, Ishikake M, Sakaguchi S, Ebe K, Tada K, Endo Y, Etoh T, Nakashima M, Inomata M. Development of an artificial intelligence system using deep learning to indicate anatomical landmarks during laparoscopic cholecystectomy. <i>Surg Endosc</i>. <b>2021</b>; 35(4): 1651-1658.</p> <p>遠藤裕一. 胆嚢摘出術におけるAIを用いた胆管損傷回避法. <i>胆と膵</i> 42(7), 医学図書出版, 東京, 2021.</p>  |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院腫瘍センター・講師  |  |
| 氏名     | 大津 智 (Otsu Satoshi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2006年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|         |           |
|---------|-----------|
| 研究分野    | がんの薬物療法開発 |
| 研究キーワード | がん薬物療法    |

|      |   |
|------|---|
| 研究内容 | <p>JCOG2004:切除不能進行・再発大腸癌に対する二次化学療法におけるFOLFIRI療法と併用するVEGF阻害薬（ペバシズマブ、ラムシルマブ、アフリベルセプト）の選択に有用なバイオマーカーを探索するランダム化第II相試験</p> <p>・研究の目的</p> <p>切除不能進行・再発大腸癌における二次化学療法の標準治療であるペバシズマブ（BEV）＋5-FU＋ロイコボリン＋イリノテカン（FOLFIRI）療法（BEV併用FOLFIRI療法）に対して、試験治療であるラムシルマブ（RAM）＋FOLFIRI療法（RAM併用FOLFIRI療法）、アフリベルセプトベータ（AFL）＋FOLFIRI療法（AFL併用FOLFIRI療法）をランダム化し、治療法の選択に有効な効果予測因子となるバイオマーカーを探索する。</p> <p>また、効果予測因子となるバイオマーカーが判明した場合には、BEV併用FOLFIRI療法に対してRAM併用FOLFIRI療法、AFL併用FOLFIRI療法の有効性が期待される集団を抽出し、次期第III相試験の対象を設定する。</p> <div data-bbox="667 1039 1158 1323" data-label="Diagram"> <pre> graph TD     A["フッ化ピリミジン、オキサリプラチンを含む<br/>一次化学療法に不応となった<br/>切除不能進行・再発大腸癌<br/>PS 0-2、20歳以上"] --&gt; B["ランダム化<br/>割付調整因子<br/>①施設、②PS(0-1 vs. 2)、③BEV使用歴(なし vs. あり)、④RAS<br/>遺伝子変異(野生型 vs. 変異型)"]     B --&gt; C["A群<br/>ペバシズマブ＋<br/>FOLFIRI療法"]     B --&gt; D["B群<br/>ラムシルマブ＋<br/>FOLFIRI療法"]     B --&gt; E["C群<br/>アフリベルセプト＋<br/>FOLFIRI療法"]   </pre> </div> <p>・研究者の役割：研究事務局（プロトコル作成、試験のマネージメント、遂行）</p> <p>そのほか参加中の臨床試験</p> <p>・ JCOG1213, JCOG1314, JCOG1503C, JCOG1510, JCOG1904, JCOG2014 等</p> |
|------|---|

|               |  |
|---------------|--|
| 研究業績・アピールポイント | <p>●Phase 1 Trial of Avelumab (anti-PD-L1) in Japanese Patients With Advanced Solid Tumors, Including Dose Expansion in Patients With Gastric or Gastroesophageal Junction Cancer: The JAVELIN Solid Tumor JPN Trial</p> <p>Toshihiko Doi , Satoru Iwasa , Kei Muro , Taroh Satoh , Shuichi Hironaka , Taito Esaki , Tomohiro Nishina , Hiroki Hara , Nozomu Machida , Yoshito Komatsu , Yasuhiro Shimada , Satoshi Otsu , Shin Shimizu , Morihiko Watanabe</p> <p>Gastric Cancer, 22 (4), 817-827 Jul 2019</p> <p>●Phase II Trial of Aflibercept With FOLFIRI as a Second-Line Treatment for Japanese Patients With Metastatic Colorectal Cancer</p> <p>Tadamichi Denda , Daisuke Sakai , Tetsuya Hamaguchi , Naotoshi Sugimoto , Takashi Ura , Kentaro Yamazaki , Hirofumi Fujii , Takeshi Kajiwara , Takako Eguchi Nakajima , Shin Takahashi , Satoshi Otsu , Yoshito Komatsu , Fumio Nagashima , Toshikazu Moriwaki , Taito Esaki , Takeo Sato , Michio Itabashi , Eiji Oki , Toru Sasaki , Yoshinori Sunaga , Samira Ziti-Ljajic , Claire Brillac , Takayuki Yoshino</p> <p>Cancer Sci, 110 (3), 1032-1043 Mar 2019</p> |
|---------------|--|

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院麻酔科・講師   |  |
| 氏名     | 奥田 健太郎 (Okuda Kentaro)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2011年12月   |   |
| SDGs目標 |   |   |

**研究分野** 緩和医療学、ペインクリニック

**研究キーワード** 鎮痛薬、オピオイド鎮痛薬、神経ブロック療法

**研究内容**

- ① がん起因する痛みの緩和に関する研究・実践  
鎮痛薬と神経ブロック療法を併用することで鎮痛の質の向上を図る (論文1・著書1・総説2)
- ② がん起因する痛みに使用する薬剤の適正な使用に関する教育  
特にオピオイド鎮痛薬の使用に関して、適正な使用が重要であり、ケミカルコーピングなど (該当論文なし)
- ③ がん教育の推進 (小学校・中学校・高等学校を対象に実施する予定、該当論文なし)
- ④ 痛みの緩和に関する実践・教育・研究 (論文2・3、総説1・3)

**研究業績・アピールポイント**

- 論文
  - 1.2003年 Pharma Medica 癌性疼痛管理におけるSSRIの鎮痛補助的役割；塩酸パロキセチン奏効例
  - 2.2011年 J Anesth  
The antinociceptive effects of estradiol on adjuvant-induced hyperalgesia in rats involve activation of adrenergic and serotonergic systems.
  - 3.2012年 Journal of Surgical Research  
New anthranilic acid derivative, EAntS-GS, attenuates Freund's complete adjuvant-induced acute pain in rats.
- 著書
  - 1.2013年 癌性疼痛 6.a2アゴニスト
- 総説
  - 1.2002年 LISA ロピバカインによる術後鎮痛
  - 2.2017年 プロフェッショナルがんナーシング  
ペインZOOへようこそ！動物にたとえて患者さんにスルッと伝わるがん疼痛Q&A
  - ⑤神経障害性疼痛～ハリネズミ～
  - 3.2019年 LiSA 2019年別冊春号  
痛みだけ診ていればいいわけではない！交通事故患者の複合性局所疼痛症候群から学んだこと

|               |  |   |
|---------------|--|---|
| 所属・職位         | 医学部附属病院精神科・講師  |  |
| 氏名            | 河野 健太郎 (Kohno Kentaro)   |   |
| 取得学位          | 博士 (医学)、大分大学、2015年3月   |   |
| SDGs目標        |   |   |
| 研究分野          | 精神神経医学   |   |
| 研究キーワード       | 微量元素、飲料水、犯罪、疫学研究   |   |
| 研究内容          | <p>●リチウムと犯罪率に関する研究</p> <p>水道水中の微量リチウムがメンタルヘルスに与える影響について、全世界で様々な研究が行われてきた。筆者らは水道水リチウムと犯罪率の関連について、九州に焦点を当てて研究を行った。その結果、水道水リチウム濃度が有意に犯罪率に影響を与えることが判明した。今後、さらに同研究を発展させていく (論文1)。</p> <p>●気質と光</p> <p>光をあびると双極性障害の病前気質である発揚気質が維持・増進されるのではないかとの仮説を検証するため、2市の住民を対象に気質の質問紙を施行した。その結果、日照量の多い市の住民の方が、日照量の少ない市の住民よりも発揚気質得点が有意に高いことを示した (論文2)。さらに2市の中間の日照量を有する市を加え、3市でさらなる調査を行った。その結果、3市において日照量が増えるごとに発揚気質得点が増加するという、量・反応関係が認められた (論文3)。</p>   |   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>これまで上記のような研究を行ってきた。以下に論文を示す。</p> <p>●論文</p> <p>1、Lithium in drinking water and crime rates in Japan: cross-sectional study. Kentaro Kohno, Nobuyoshi Ishii, Hirohumi Hirakawa and Takeshi Terao Br J Psych Open. 2020 Oct 15;6(6):e122.</p> <p>2、Latitude effect on bipolar temperaments. Kentaro Kohno, Nobuhiko Hoaki, Takeshi Inoue, Yukiei Nakai, Atsuhito Toyomaki, Yasuo Araki, Koji Hatano, Takeshi Terao J Affective Disord. 2012 Dec 15;142(1-3):53-6.</p> <p>3、Dose-dependent effects of light on hyperthymic temperament. <u>Kentaro Kohno</u>, <u>Hajime Baba</u>, <u>Takeshi Inoue</u>, <u>Yukiei Nakai</u>, <u>Atsuhito Toyomaki</u>, <u>Toshihito Suzuki</u>, <u>Koji Hatano</u>, <u>Heii Arai</u>, <u>Takeshi Terao</u> J Affect Disord. 2014 Jun;162:26-9.</p> |   |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

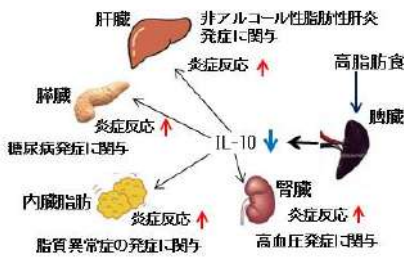
その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院歯科口腔外科・講師  |  |
| 氏名     | 河野 辰行 (Kono Tatsuyuki)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2021年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 口腔癌   |
| 研究キーワード       | 口腔癌治療、頸部リンパ節転移、口腔癌検診  |
| 研究内容          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・口腔癌頸部リンパ節転移の画像診断と病理組織像に関する研究<br/>口腔癌の治療成績に大きく関与する頸部リンパ節転移の早期診断を目的とした頸部超音波検査による画像評価と病理組織所見および免疫組織化学的所見の関連についての検討を行った。転移リンパ節の中には急速な増大を認める群と緩徐な増大を認める群が存在し、リンパ節の免疫組織化学的所見 (Ki-67) に相関が見られた。さらに転移リンパ節の免疫組織化学的所見と原発腫瘍の免疫組織化学的所見に相関を認め原発腫瘍の組織像から転移リンパ節の増大様式を予測できる可能性が示された。(下記論文)</li> <li>・口腔癌を含む顎骨再建治療と術後の形態回復および機能回復に関する研究<br/>下顎骨の欠損に対して遊離腓骨皮弁を用いた下顎骨の再建を実施し、その術後の顔貌形態の回復の程度および再建に伴う機能の回復 (会話、咀嚼、嚥下) がどの程度得られているかを後ろ向きに解析し良好な機能回復を得るために必要な因子の解析を行っている。</li> <li>・大分県における口腔癌検診の実施とその有病率に関する研究<br/>大分県の郡市において市民を対象とした口腔癌検診を実施し、口腔癌の有病者率および口腔潜在的悪性疾患の有病率について調査・解析を行っている。</li> </ul> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>論文)<br/>Relation between proliferative activity of tumor cells and the enlargement pattern of metastatic lymph nodes in oral squamous cell carcinomas. Tatsuyuki Kono, Yoshihiro Takahashi, Kazuhiro Kawamura, Noriaki Yamamoto, Ayaka Abe, Masahiro Ohara, Kenji Kawano Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology 29(2), 116-121 2017</p>  |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院内分泌・糖尿病内科・講師   |  |
| 氏名     | 後藤 孔郎 (Gotoh Koro)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2005年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|         |                  |
|---------|------------------|
| 研究分野    | 神経内分泌学           |
| 研究キーワード | 脾臓、IL-10、臓器連関、肥満 |

|      |   |   |
|------|---|---|
| 研究内容 | <p><b>1. 脾臓由来IL-10発現低下が肥満による全身性炎症性病変の発症に関与している。</b></p> <p>2008年から肥満による脾臓由来IL-10合成能の低下が肥満に伴う全身性炎症病態の発症や糖脂質代謝異常に深く関与していることが明らかにした。食餌誘導性肥満モデル動物では、脾臓からの抗炎症性サイトカインであるIL-10合成が低下しており、その低下が中枢神経の視床下部、肝臓や内臓脂肪、膵臓、腎臓、心臓といったように多臓器にわたり炎症性病変をもたらすという結果は、世界的に注目されている。</p> |  |
|      | <p><b>2. 中枢神経を介したインクレチンと膵島のクロストークについて解明した。</b></p> <p>小腸のL細胞から分泌されるインクレチンである glucagon-like peptide-1 (GLP-1) は門脈を介して肝臓に到達した後、肝臓由来求心性神経を活性化させ、その活性が中枢神経に伝達される。その刺激は膵臓への遠心性神経を活性化させ、膵臓でのグルカゴン分泌の抑制や膵島の保護作用をもたらすことを明らかにした。</p>                                     |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究業績・アピールポイント | <ol style="list-style-type: none"> <li>Gotoh K, Inoue M, Masaki T, et al. A novel anti-inflammatory role for spleen-derived interleukin-10 in obesity-induced hypothalamic inflammation. <b>J Neurochem.</b> 120, 752-764, 2012.</li> <li>Gotoh K, Inoue M, Masaki T, et al. A novel anti-inflammatory role for spleen-derived interleukin-10 in obesity-induced inflammation in white adipose tissue and liver. <b>Diabetes</b> 61, 1994-2003, 2012</li> <li>Gotoh K, Inoue M, Masaki T, et al. Obesity-related chronic kidney disease is associated with spleen-derived IL-10. <b>Nephrol Dial Transplant.</b> 28, 1120-1130, 2013</li> <li>Gotoh K, Inoue M, Shiraishi K, et al. Spleen-derived interleukin-10 downregulates the severity of high-fat diet-induced non-alcoholic fatty pancreas disease. <b>PLoS One.</b> 7, e53154, 2012</li> <li>Kondo H, Abe I, Gotoh K, et al. Interleukin 10 Treatment Ameliorates High-Fat Diet-Induced Inflammatory Atrial Remodeling and Fibrillation. <b>Circ Arrhythm Electrophysiol.</b> 11(5):e006040. 2018</li> <li>Fujiwara K, Gotoh K, Chiba S, et al. Intraportal administration of DPP-IV inhibitor regulates insulin secretion and food intake mediated by the hepatic vagal afferent nerve in rats. <b>J Neurochem.</b> 121:66-76. 2012</li> <li>Gotoh K, Masaki T, Chiba S, et al. Hypothalamic brain-derived neurotrophic factor regulates glucagon secretion mediated by pancreatic efferent nerves. <b>J Neuroendocrinol.</b> 25, 302-311, 2013</li> <li>Ando H, Gotoh K, Fujiwara K, et al. Glucagon-like peptide-1 reduces pancreatic <math>\beta</math>-cell mass through hypothalamic neural pathways in high-fat diet-induced obese rats. <b>Sci Rep.</b> 7, 5578. 2017</li> </ol> <p>2009年：第52回日本糖尿病学会 プレジデントポスター賞<br/> 2012年：第50回日本糖尿病学会 九州支部賞、第2回大分大学医学部表彰<br/> 2013年：第63回日本体質医学会 研究奨励賞<br/> 2014年：第87回日本内分泌学会 研究奨励賞、第35回日本肥満学会 学術奨励賞<br/> 2015年：第21回日本膵臓病研究財団 膵臓病研究奨励賞</p> |
|---------------|---|

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救命救急センター・講師  |  |
| 氏名     | 柴田 智隆 (Shibata Tomotaka)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2008年12月   |   |
| SDGs目標 |   |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 消化器外科学 外傷学   |
| 研究キーワード       | 食道疾患 Acute care surgery  |
| 研究内容          | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 食道癌に対する低侵襲治療に関する研究<br/>食道癌手術は開胸・開腹を伴う消化器外科領域で最も高侵襲な手術であるが、近年の内視鏡下手術の発展に伴い様々な低侵襲アプローチの開発が進んでいる。<br/>我々は開胸を伴わないアプローチとして縦隔鏡下に食道切除を行う方法を行っており低侵襲な食道癌手術開発に取り組んでいる。(論文1)</li> <li>● 食道癌術後患者の栄養状態の調査・研究<br/>食道癌手術は手術自体が高度な侵襲を伴うものであるのみならず、胃を管状にして再建する(胃管再建)こと、胃食道逆流防止機構を全て切除すること、により術後の栄養状態にも大きく影響する。<br/>食道癌手術後の患者の栄養状態を評価することにより、その改善点を検討している。</li> <li>● 外傷手術教育<br/>致死的外傷において、外科的処置は欠かせないものであるが近年その機会は著しく減少している。<br/>外科医及び救急医に対する外傷手術トレーニングとして施設内で「外傷外科手術治療戦略コース(SSTT)」及び「献体による外傷手術臨床解剖学的研究会:C-BEST(Cadaver-based educational seminar for trauma surgery)」などのトレーニングコースを開催し外傷外科医育成に取り組んでいる。(論文2,3)<br/>※関連リンク SSTT: <a href="https://sstt-trauma.org">https://sstt-trauma.org</a><br/>C-BEST: <a href="http://cadaverbasedsurgicaltrainingfortrauma.kenkyuukai.jp/special/?id=30235">http://cadaverbasedsurgicaltrainingfortrauma.kenkyuukai.jp/special/?id=30235</a></li> </ul> |
| 研究業績・アピールポイント | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文1【縦隔を覗き、さらにくり抜く-これからの食道・胃外科手術】非胸腔アプローチによる食道癌手術 新規手術手技の導入に際しての注意事項 非胸腔アプローチを開始するにあたって 柴田 智隆, 鈴木 浩輔, 錦 耕平, 衛藤 剛, 猪股 雅史 臨床外科73巻5号 Page594-597(2018.05)</li> <li>● 論文2【急性腹症に対する低侵襲アプローチ-適応と手技】緊急手術としての低侵襲アプローチ 急性腹症への応用pros&amp;cons 柴田 智隆, 河野 洋平, 平塚 孝宏, 赤木 智徳, 猪股 雅史: 外科79巻9号 Page801-804(2017.09)</li> <li>● 論文3【腹部外傷治療戦略】腹部外傷診療体制の構築をめざして 柴田 智隆, 武内 裕, 松成 修, 鍋田 祐介, 猪股 雅史, 坂本 照夫 日本腹部救急医学会雑誌 (1340-2242)39巻5号 Page855-858(2019.07)</li> </ul>   |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院形成外科・講師  |  |
| 氏名     | 清水 史明 (Shimizu Fumiaki)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2010年6月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 傷跡治療 同種間顔面移植 顔面神経麻痺治療  |
| 研究キーワード       | 瘢痕 ケロイド 顔面移植 顔面神経麻痺  |
| 研究内容          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 傷跡評価用の診断アプリケーションの開発<br/>JSW scar scaleを用いて、傷跡写真の傷跡の重症度を決定する。このデータを1000画像以上人工知能に学習させて、傷跡重症度評価用の人工知能の作成に取り組んでいる。</li> <li>・ ケロイドの治療法の開発<br/>ラットを用いた瘢痕モデルを用いて、様々な薬剤にて瘢痕組織が改善するかどうかを観察して、傷跡治療に有効な薬効成分を調査する。</li> <li>・ 同種間顔面移植の基礎研究<br/>動物実験にて同種間の皮膚を含んだ複合組織を移植して、その拒絶反応をコントロールする方法を研究している。</li> <li>・ 同種間顔面移植の臨床応用への研究<br/>近年海外などで行われている人から人への顔面移植の本邦での手術方法やガイドライン作成を、学会、他大学と連携して行っている。</li> <li>・ 顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の臨床研究<br/>顔面神経麻痺に対する新しい手術法を開発し、その成果を国内外に報告している。</li> <li>他 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の基礎研究</li> <li>・ 末梢神経再建における人工神経の基礎研究</li> <li>・ 末梢神経再建における人工神経と幹細胞併用法の研究</li> </ul> </li> </ul>   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>関連文献</p> <p>Shimizu F, Okamoto O, Katagiri K, Fujiwara S, Wei FC. Prolonged ischemia increases severity of rejection in skin flap allotransplantation in rats. <i>Microsurg</i> 30: 132-137, 2010.</p> <p>Shimizu F, Ootari M, Uehara M, Takahashi Y, Kawano K, Effect of concurrent mental nerve reconstruction at the same time as mandibular reconstruction using a fibula osteoseptocutaneous flap. <i>J Plast Reconstr Aesthet Surg</i> 68(9): 1228-1234, 2015</p> <p>Shimizu F, Uehara M, Ootari M, Kusatsu M. Three-dimensional visualization of the human face using DICOM data and its application to facial contouring surgery using free anterolateral thigh flap transfer. <i>J Plast Reconstr Aesthet Surg</i> 69(1):e1-4., 2016</p> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院心血管外科・講師   |  |
| 氏名     | 首藤 敬史 (Shuto Takashi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2016年9月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 成人心血管、人工臓器、IBTA(in-body tissue architecture)  |
| 研究キーワード       | 大動脈瘤、補助人工心臓、バイオチューブ   |
| 研究内容          | <p>①胸腹部大動脈瘤に対するハイブリッド治療の研究。<br/>         胸腹部大動脈瘤は最も治療が難しい動脈瘤です。当科では手術のハイリスク患者に対して腹部内臓血管バイパス術と胸部ステントグラフト内挿術を組み合わせたハイブリッド手術をおこなってきました。その10年を超える遠隔期の成績、4D flow MRIを使用してバイパスされた腹部内臓血管への血流分布のデータ解析をおこなってきました(論文1、2)。</p> <p>②補助人工心臓に関する研究。<br/>         心臓移植を必要とするような重症心不全患者に対しては補助人工心臓が装着されます。重症心不全患者に対しての機械的補助に関する臨床研究をおこなっています。</p> <p>③生体内組織形成術(IBTA)による小口径代用血管の作成とその臨床応用に関する研究。<br/>         重症下肢虚血は血行再建がおこなわれなければ下肢の切断に至る病態です。下肢のバイパス手術が一般的な治療法ですが、特に下腿の小口径自家動脈へのバイパスは自家静脈グラフトの使用が推奨されます。自家静脈が使用できない場合に、生体内組織形成術で自己組織による代用血管(バイオチューブ)を作成し、それを使用したバイパス術を動物実験でおこなってきました。将来はその臨床への応用を期待しています。</p> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>大分大学心血管外科ではヤギや豚などの大型動物実験をおこなうことができます。<br/>         臨床での手術件数も豊富なため、多くの臨床研究もおこなわれ、国内外の学会で報告しています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、Ten-year experience of the thoraco-abdominal aortic aneurysm treatment using a hybrid thoracic endovascular aortic repair</li> <li>2022年、Blood flow analysis after a renovisceral debranching procedure by four-dimensional flow magnetic resonance imaging</li> </ol>   |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院消化器外科・講師   |  |
| 氏名     | 白下 英史 (Shiroshita Hidefumi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分医科大学、2004年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 消化器外科学   |
| 研究キーワード       | 内視鏡外科、低侵襲手術、外科腫瘍学、腸内細菌叢  |
| 研究内容          | <p><u>胃癌腹膜播種に対するパルスレーザーを用いた新規光線療法の開発</u><br/>肉眼的にすべての病巣を診断することが難しく、腸閉塞や腹水により患者QOLを低下させる難治性の胃癌腹膜播種病変に対するより効果的で正常組織に影響の少ないパルスレーザー光線照射を用いた新規治療法を開発することを目的とする。そのために①抗腫瘍効果をしめす至適な照射量の確認、②レーザー光線照射が癌細胞と癌微小環境に与える影響の評価、③内視鏡などに使用される細いファイバーからより広範囲の病変を治療するため、レーザー光を拡散させるデバイスの開発、を行っている。</p> <p><u>COVID-19感染拡大が及ぼす内視鏡下手術への影響の評価</u><br/>NCDデータベースを用いて、COVID-19感染拡大が内視鏡下手術に与えた影響を明らかにすることである。主要な内視鏡下手術の手術件数の変化や手術成績をしらべることにより、COVID-19感染拡大時における内視鏡下手術の問題点や課題を明らかにする。</p> <p><u>大腸癌再発における腸内細菌叢の変化に関する研究</u><br/>腸内細菌が発癌や予後に影響すると考えられている大腸癌に関して、周術期の腸内細菌叢の構成や変化と大腸癌の再発の有無を調べることにより、大腸癌再発に関与する腸内細菌叢を明らかにする。</p>  |
| 研究業績・アピールポイント | <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、Current Status of Endoscopic Surgery in Japan: The 15th National Survey of Endoscopic Surgery by the Japan Society for Endoscopic Surgery Asian J Endosc Surg. 2021</li> <li>2018年Clinical Impact of Laparoscopic Intersphincteric Resection following Neoadjuvant Chemoradiotherapy for Locally Advanced Rectal Cancer: Case controlled study. Annals of Laparoscopic and Endoscopic Surgery, 3:37, 2018</li> <li>2016年Prognostic factors in advanced gastric cancer patients with suprapancreatic lymph node metastasis. Journal of Gastrointestinal cancer and stromal tumor. 1: 102, 2016</li> <li>2004年Re-evaluation of mucin phenotypes of gastric minute well-differentiated-type adenocarcinomas using a series of HGM, MUC5AC, MUC6, M-GGMC, MUC2 and CD10 stains Pathol Int. 54(5):311-21, 2004.</li> </ol> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院小児科・講師   |  |
| 氏名     | 関口 和人 (Sekiguchi Kazuhito)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2020年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 小児科学  |
| 研究キーワード       | 新生児、栄養、SGA児、オートファジー   |
| 研究内容          | <p>●網羅的代謝物解析によるSGA児の新たな発達予測因子の探求</p> <p>本研究は胎児発育遅滞の発生要因の究明や新生児発達の予測因子の究明に向けた基礎的知見を見出すことを目的としています。妊娠期間に比して低体重で出生した新生児では運動発達遅滞に加え、精神発達遅滞や情緒行動の異常を呈するリスクが高いとされています。その傾向は早産のみならず、正常産においても認められます。</p> <p>我々は、妊娠期間に比して低体重で出生した新生児は胎児期に何らかの特徴的な代謝特性を持ち、例えば神経伝達物質の増減や神経組織形成障害を通じて神経発達に影響するのではないかと考えました。本研究では臍帯静脈血および新生児血の網羅的な代謝物解析を行うことで、胎児発育に関与する代謝物や代謝経路を明らかにしていきます。</p> <p style="text-align: right;">(科研費 基盤研究 (C) 21K07774)</p> <p>●肝臓のオートファジーが新生児期に果たす役割の検討</p> <p>我々は先行研究において、新生児の肝臓オートファジーと肝細胞のミトコンドリア形態に関連があることを明らかにしました (論文①)。</p> <p>本研究は、新生児の肝臓においてオートファジーがミトコンドリア活性 (働き) にどのような機序で関与するのかを明らかにすることを目標としています。この研究により肝臓オートファジーの新生児期における役割、例えば感染免疫や解毒作用への貢献が明らかになれば、新生児集中治療室における敗血症や代謝異常症管理の新たなバイオマーカーや治療法の確立の第一歩となり得ます。</p> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>論文① Sekiguchi K, Miyahara H, Inoue M, Maeda T, Ihara K. The autophagy reaction in the human umbilical cord: a potential marker for estimating fetal nutrition and neonatal growth. J Matern Fetal Neonatal Med. 2022 ; 35 : 625-629.</p> <p>論文② Sekiguchi K, Miyahara H, Inoue M, Kiyota K, Sakai K, Hanada T, Ihara K. Metabolome Characteristics of Liver Autophagy Deficiency under Starvation Conditions in Infancy. Nutrients. 2021 ; 13 : 3026</p> <p>論文③ Sekiguchi K, Itonaga T, Maeda T, Fukami M, Yorifuji T, Ihara K*. A case of CHARGE syndrome associated with hyperinsulinemic hypoglycemia in infancy. Eur J Med Genet. 2018 ; 61 : 312-314.</p>   |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院放射線科・講師  |  |
| 氏名     | 高司 亮 (Takaji Ryo)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2016年9月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 放射線医学   |
| 研究キーワード       | 腹部画像診断 インターベンショナルラジオロジー(IVR)  |
| 研究内容          | <p>主に腹部領域で画像診断及びインターベンショナルラジオロジーに関する研究を行っています。MDCTやMRIを用いた腹部間膜画像解剖や膵臓の画像診断、泌尿生殖器領域の画像診断およびインターベンショナルラジオロジーに興味を持って研究に従事しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 腹部間膜の画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・後腹膜解剖の個体差に関する研究(業績1)。</li> </ul> </li> <li>② 膵臓の画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・小径膵癌のCT画像所見に関する研究(業績2)。</li> <li>・早期膵癌のCT画像所見に関する研究(業績3)。</li> </ul> </li> <li>③ 婦人科領域の急性疾患を対象とした画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・婦人科急性腹症のCT診断に関する研究。</li> <li>・産科出血の血管造影所見やインターベンショナルラジオロジーに関する研究(業績4)。</li> </ul> </li> <li>④ 泌尿器領域の画像診断 <ul style="list-style-type: none"> <li>・前立腺癌のMRI診断に関する研究。</li> </ul> </li> </ol> <p>日常診療で感じた疑問を掘り下げて臨床に根ざした研究をするように心掛けています。</p>   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>1) Takaji R, Mori H, Yamada Y, et al. Medial pathway patterns of the right retromesenteric plane: anatomical investigation using MDCT in patients with acute pancreatitis and pyelonephritis. Br J Radiol. 2016;89(1059):20150471. doi: 10.1259/bjr.20150471. Epub 2015 Dec 23.</p> <p>2) Takaji R, Tamada Y, Matsumoto S, et al. Small pancreatic ductal carcinomas on triple-phase contrast-enhanced computed tomography: enhanced rims and the pathologic correlation. Abdom Radiol (NY). 2018 Dec;43(12):3374-3380. doi: 10.1007/s00261-018-1645-6.</p> <p>3) Takaji R, Yamada Y, Shimada R, et al. Retrospective evaluation of venous phase contrast-enhanced computed tomography images in patients who developed pancreatic adenocarcinomas after treatment for nonpancreatic primary cancer. BJR Open. 2021 Jul 5;3(1):20200069. doi: 10.1259/bjro.20200069. eCollection 2021.</p> <p>4) Takaji R, Kiyosue H, Maruno M, et al. Angiographic features and transarterial embolization of retained placenta with abnormal vaginal bleeding. CVIR Endovasc. 2021 Nov 2;4(1):77. doi: 10.1186/s42155-021-00265-z.</p> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

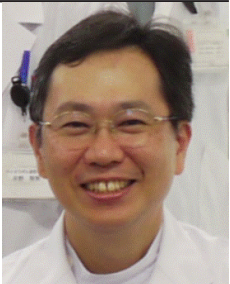

理工学部

福祉健康科学部


その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院輸血部・講師   |  |
| 氏名     | 高野 久仁子 (Takano Kuniko)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2019年12月   |   |
| SDGs目標 |   |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 血液内科学   |
| 研究キーワード       | 造血幹細胞移植、移植後HHV-6脳炎、造血幹細胞移植後合併症、移植後LTFU  |
| 研究内容          | <p>● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6(HHV-6)脳炎について、重症化に関する髄液および血漿サイトカインの動態についての検討</p> <p>同種造血幹細胞移植後の重篤な中枢神経合併症である移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎について、その疾患概念、診断、治療法の確立に向け世界を牽引してきた緒方正男教授のご指導の下、移植後HHV-6脳炎発症例の多くが、生着症候群をはじめとする移植後早期免疫反応に引き続き、脳炎を発症していることより高サイトカイン血症の関与について着目し、移植後HHV-6脳炎の重症化と髄液および血漿サイトカインの動態について検討を行いました。移植後HHV-6脳炎の重症化には、発症時の髄液IL-6、IL-8、および発症1週間前の血漿IL-6、IL-7、MCP-1、IL-12、髄液ウイルス量の関与が示唆され、特に、髄液IL-6、IL-8については病態形成への関与や中枢神経系の炎症の強さを反映するため、予後予測に有用なバイオマーカーとなり得ることが示唆されました(論文1)。脳炎の重症化に過剰な免疫反応が関与するならば、免疫抑制剤の強化や抗サイトカイン療法によって脳炎の重症化を抑制に繋げることができないか、が今後の研究課題である。</p> <p>● 同種造血幹細胞移植後合併症の克服のための研究</p> <p>同種造血幹細胞移植後の合併症克服のため日本造血細胞移植学会・合併症ワーキンググループに参加している。全国データを用い、移植前DMの存在が移植成績に与える影響について同種移植例9478例を対象に後方視的解析を行い、移植前の糖尿病の存在は、documented infectionの累積発症率を上昇させ、特にムーコル症の発症リスクは有意に上昇すること、移植前の糖尿病の存在は非再発死亡特に感染症死亡のリスク因子となることを明らかにし、論文発表を行なった(論文2)。</p>   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>●論文</p> <p>1. Takano K, Ogata M, Satou T, Miyazaki Y, Otsuka E, Saito N, Ueki T, Kako S, Fukuda T, Shirao K. Correlations of cytokine levels in cerebrospinal fluid and peripheral blood with outcome of HHV-6B encephalitis after hematopoietic stem cell transplantation. <i>Transpl Infect Dis</i> 21: e13172, 2019.</p> <p>2. Takano K, Fuji S, Uchida N, Ogawa H, Ohashi K, Eto T, Sakamaki H, Morishima Y, Kato K, Suzuki R, Fukuda T. Pre-transplant diabetes mellitus is a risk factor for non-relapse mortality, especially infection-related mortality, after allogeneic hematopoietic SCT. <i>Bone Marrow Transplant</i>. 50: 553-8, 2015.</p> <p>3. Takano K, Ogata M, Kawano R, Satou T, Nashimoto Y, Shirao K. Comparison of HHV-6 DNA detection in plasma and whole blood in allogeneic hematopoietic stem cell transplant recipients: frequent false-positive results for active HHV-6 infection using whole blood samples. <i>Int J Hematol</i>. 108: 535-542, 2018.</p> <p>4. Fuji S, Hirakawa T, Takano K, Doki N, Sawa M, Kanda Y, Uchida N, Ara T, Miyamoto T, Eto T, Matsuoka KI, Kawakita T, Ozawa Y, Katayama Y, Onizuka M, Fukuda T, Atsuta Y, Nakasone H. Disease-specific impact of anti-thymocyte globulin in allogeneic hematopoietic cell transplantation: a nationwide retrospective study on behalf of the JSTCT, transplant complications working group. <i>Bone Marrow Transplant</i>. Online ahead of print. PMID: 35039621, 2022 Jan.</p> <p>●著書</p> <p>緒方正男、高野久仁子、橋井佳子、植木俊光、森康雄. 造血細胞移植ガイドライン, HHV-6 (第2版) 日本造血・免疫細胞療法学会 (JSTCT)<br/> <a href="https://www.jshct.com/uploads/files/guideline/01_03_03_hhv6_02.pdf">https://www.jshct.com/uploads/files/guideline/01_03_03_hhv6_02.pdf</a></p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院検査部・講師   |  |
| 氏名     | 手嶋 泰之 (Teshima Yasushi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分医科大学、2000年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 循環器病学、臨床検査医学  |
| 研究キーワード       | 心筋虚血再灌流障害、血糖変動  |
| 研究内容          | <p>・糖尿病が心機能に及ぼす影響と心疾患との関連についての研究<br/>糖尿病モデル動物では心筋内のカルシウム動態の異常が出現しており左室拡張機能の低下につながる可能性を見出し報告した (論文1)。また糖尿病心筋における活性酸素種の増加とその機序としてカルシウムカルモジュリン依存性蛋白質キナーゼが関与することを見出した (論文2, 3)。</p> <p>・心筋虚血再灌流障害の軽減に関する研究<br/>心筋代謝、ミトコンドリア機能を制御することにより心筋虚血再灌流に対して心保護効果をもたらすことを報告した (論文4, 5)。</p> <p>・血糖変動が心筋、心機能に及ぼす影響に関する研究<br/>上記の研究を行なう中で、高血糖状態が持続する病態よりも血糖変動が大きい方が心筋細胞に与えるダメージが大きいのではないかと印象を得た。まず長期間の血糖変動への曝露が心房組織の変性をもたらし心房細動を惹起することを発見し (論文6)、さらに血糖変動が虚血再灌流による心筋ダメージを拡大することを発表した (論文7)。以上の基礎実験で得られた知見を基に、心不全患者の血糖モニタリングを行なった結果、多くの心不全患者において夜間から早朝に低血糖を認め論文として報告した (論文8)。</p>   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>【論文】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <u>Teshima Y</u>, et al. Diminished expression of sarcoplasmic reticulum Ca<sup>2+</sup>-ATPase ryanodine sensitive Ca<sup>2+</sup> channel mRNA in streptozotocin-induced diabetic rat heart. <b>J. Mol. Cell. Cardiol</b>, <b>32</b> 655-664, 2000</li> <li>2. Nishio S, <u>Teshima Y</u>, et al. Activation of CaMKII as a key regulator of reactive oxygen species production in diabetic rat heart. <b>J Mol Cell Cardiol</b> <b>52</b>: 1103-1111, 2012</li> <li>3. <u>Teshima Y</u>, et al. Production of reactive oxygen species in the diabetic heart. Roles of mitochondria and NADPH oxidase. <b>Circ J</b> <b>78</b>: 300-306, 2014</li> <li>4. <u>Teshima Y</u>, Akao M, Jones SP, Marbán E. Uncoupling protein-2 overexpression inhibits mitochondrial death pathway in cardiomyocytes. <b>Circ Res</b>, <b>93</b> 192-200, 2003</li> <li>5. <u>Teshima Y</u>, Akao M, Jones SP, Marbán E. Cariporide (HOE642), a selective Na<sup>+</sup>-H<sup>+</sup> exchange inhibitor, inhibits the mitochondrial death pathway. <b>Circulation</b>, <b>108</b> 2275-81, 2003</li> <li>6. Saito S, <u>Teshima Y</u>, et al. Glucose fluctuations increase the incidence of atrial fibrillation in diabetic rats. <b>Cardiovasc Res</b> <b>104</b>: 5-14, 2014</li> <li>7. Saito S, Thuc LC, <u>Teshima Y</u>, et al. Glucose fluctuations aggravate cardiac susceptibility to ischemia/ reperfusion injury by modulating microRNAs expression. <b>Circ J</b> <b>80</b>: 186-195, 2016</li> <li>8. <u>Teshima Y</u>, et al. Potential risk of hypoglycemia in patients with heart failure. <b>Int Heart J</b> <b>61</b>: 776-780, 2020</li> </ol> <p>【著書】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 手嶋泰之 シンプル循環器学 (犀川哲典、小野克重 編) 8章第三部 循環器疾患に有用な血液検査、バイオマーカー 139-143, 15章 心不全 243-268 南江堂, 2015</li> <li>2. 手嶋泰之、高橋尚彦 知っておきたい臨床検査値 (第2版) (日本薬学会編) 第三部17章 循環器疾患、65-67, 2019</li> <li>3. 手嶋泰之 臨床検査のガイドライン JSLM2021, 第2章 症候 循環器「動悸」, 2021</li> </ol> |

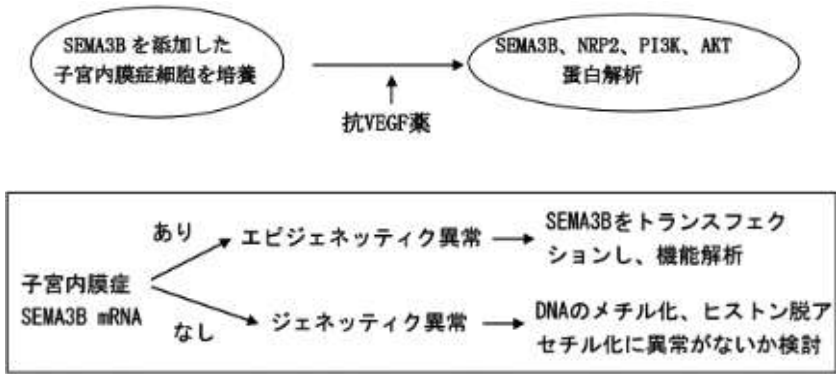
|        |  |   |
|--------|--|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院産科婦人科・講師  |  |
| 氏名     | 西田 正和 (Nishida Masakazu)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2005年3月   |   |
| SDGs目標 | <br>産業と技術革新の基盤をつくろう |   |

|         |                                   |
|---------|-----------------------------------|
| 研究分野    | 産科婦人科学                            |
| 研究キーワード | 子宮内膜症、semaphorin、neuropilinm、PI3k |

**研究内容**

子宮内膜症の病因には月経血の逆流説、体腔上皮化生説など緒説あるが、その根本的な病因は不明である。現在、子宮内膜症の病態解明および治療薬の開発に取り組み、日々研究を進めている。今回、SEMA3BとそのレセプターであるNRP2が関与していることに着目し、PI3k-AKT-mTOR系のシグナル伝達異常について研究を進めている。

現在、子宮内膜症細胞において、semaphorin (SEMA) 3Bの発現減少に起因するPI3k-AKT-mTOR経路の伝達異常を発見している。子宮内膜症細胞では正常子宮内膜間質細胞と比較してSEMA3BとNER2の蛋白発現が減弱している。この原因を明らかにするため、①子宮内膜症細胞にSEMA3Bを作用させることでPI3k-AKT-mTOR系の細胞伝達異常が正常化し、子宮内膜症の病態が改善するか②抗VEGF薬 (VEGFはNRP2のリガント) を子宮内膜症細胞に作用後、PI3k-AKT-mTOR系のシグナル伝達経路が正常化するのか③SEMA3Bの発現低下はジェネティック、あるいはエピジェネティックな要因なのかという部分を解明すべく研究を進めており、将来の子宮内膜症の治療薬の開発を目指している。






**研究業績・アピールポイント**

{beta}-Hydroxyisovalerylshikonin induces apoptosis and G0/G1 cell-cycle arrest of endometrioticstromal cells: a preliminary invitro study. Masakazu Nishida,Kaei Nasu, Tami Ueda, Akitoshi Yuge,NoriyukiTakai, Hisashi Narahara. Hum Reprod. 21(11): 2850-6, 2006)

Application of the nuclear factor- $\kappa$ B inhibitor, BAY 11-7085, for the treatment ofendometriosis: an in vitro study.Kaei Nasu,Masakazu Nishida,Tami Ueda, Akitoshi Yuge,Noriyuki Takai, Hisashi Narahara.Am J Physiol Endocrinol Metab.293(1): E16-23. 2007Role of chemokines in the pathogenesis of endometriosis. Masakazu Nishida,Kaei Nasu,HisaashiNaraharaFront Biosci (Schol Ed).1(3): 1196-1204, 2011



Reversal of gene dysregulation in cultured cytotrophoblasts reveals possible causes of preeclampsia.Zhou Y, Gormley MJ, Hunkapiller NM, Kapidzic M, Stolyarov Y, Feng V,Masakazu Nishida,Drake PM, Bianco K, Wang F, McMaster MT, Fisher SJ.J Clin Invest.123(7):2862-72.2013

|               |  |   |
|---------------|--|---|
| 所属・職位         | 医学部附属病院呼吸器・感染症内科・講師  |  |
| 氏名            | 濡木 真一 (Nureki Shinichi)  |   |
| 取得学位          | 博士 (医学)、大分医科大学、2005年9月   |   |
| SDGs目標        |     |   |
| 研究分野          | 呼吸器内科学   |   |
| 研究キーワード       | 肺線維症   |   |
| 研究内容          | <p>●特発性肺線維症の病態解明</p> <p>特発性肺線維症は、進行性・不可逆性に肺線維化を来す難治性疾患である。原因は不明のものが多く、遺伝性肺線維症の原因遺伝子であるSP-C遺伝子変異は、線維化に対する影響力が高い。SP-C遺伝子変異は、細胞の自浄作用であるオートファジーの阻害に引き続いて起こるII型肺胞上皮細胞上皮障害を引き起こす。我々は、実際の患者の遺伝子変異をマウスに組み込み、肺線維症を自然発症する<i>sftpc</i><sup>L73T</sup>ノックインマウスの樹立に世界で初めて成功した。現在同マウスを用いてさらなる肺線維症の病態解明を行っている。</p> <p>●特発性肺線維症のバイオマーカー探索</p> <p>既存の診断・疾患活動性バイオマーカーはまだ不十分な点がある。一方、メタボローム解析は代謝物を一斉分析する技術であり、その臨床応用が急速に進んでおり、難治性疾患の新たな病態解析方法として注目を集めている。特発性肺線維症における代謝異常を同定し、診断のためのバイオマーカーを探索するとともに治療薬のターゲットを探索もしている。</p> <p>●特発性肺線維症の治療薬開発</p> <p>診断確定後の平均余命はわずか2.5~5年であり、予後を改善する治療法の開発が社会から求められている。医薬基盤研究所との共同研究として官民研究開発投資拡大プログラム事業「新薬創出を加速する人工知能の開発」に参加している。九州工業大学、本学の臨床薬理学教室、薬理学教室とグループを組んで研究を行い、特発性肺線維症の治療ターゲットを見出している。現在SP-Cノックインマウス、臨床サンプルを用いて治療薬開発のための研究を継続している。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.nibiohn.go.jp/prism/works/">https://www.nibiohn.go.jp/prism/works/</a></p> |   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>●論文</p> <p>1. Nureki SI, et al. Expression of mutant <i>Sftpc</i> in murine alveolar epithelia drives spontaneous lung fibrosis. <i>J Clin Invest</i>. 2018 Aug 31;128(9):4008-4024.</p> <p>●受賞</p> <p>2016年 Respiration Research Retreat (Philadelphia, USA) — Best Poster Award<br/> 2018年 第58回日本呼吸器学会学術講演会 — International Session Award<br/> 2018年 日本サーファクタント・界面医学会第54回学術研究会 — Best Poster Award<br/> 2019年 第18回肺分子病態研究会 — 奨励賞<br/> 2020年 日本サーファクタント・界面医学会第56回学術研究会 — 学会奨励賞<br/> 2020年 第10回中塚医学賞</p>  |   |



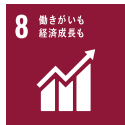
|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院麻酔科・講師   |  |
| 氏名     | 日高 正剛 (Hidaka Seigo)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2010年1月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 麻酔科学、集中治療医学  |
| 研究キーワード       | 周術期管理、急性肺傷害、敗血症、人工呼吸管理、血液浄化療法  |
| 研究内容          | <ol style="list-style-type: none"> <li>HMGB1を標的とした血液浄化の新たな敗血症治療法の開発</li> <li>重症敗血症における酸化ストレス制御を目的とした新たな血液浄化カラムの開発</li> <li>HFVCHDFが重症患者の病態改善に及ぼす影響の検討</li> <li>急性血液浄化が各種抗菌薬の血中濃度変化に及ぼす影響の検討</li> <li>重症患者における各種感染症に対する抗菌薬療法効果の検討</li> <li>リンファンゴ オキシ-アルド ステロン系制御による臓器保護効果の検討</li> <li>急性肺傷害治療法の検討</li> <li>人工呼吸管理法に関する検討</li> <li>心臓手術後の呼吸管理</li> <li>高侵襲手術における輸液、循環管理に関する検討</li> </ol>  |
| 研究業績・アピールポイント | <p><b>論文</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Gabexate mesilate inhibits the expression of HMGB1 in lipopolysaccharide-induced acute lung injury. J Surg Res. 165(1): 142-50. 2011</li> <li>Dripenem Pharmacokinetics in critically ill patients receiving continuous hemodiafiltration (CHDF). Yakugaku Zasshi. 130(1), 87-94, 2010</li> <li>Effect of Hemopurification Rate on Doripenem Pharmacokinetics in Critically Ill Patients Receiving High-flow Continuous Hemodiafiltration. Yakugaku Zasshi. 131(9):1395-9, 2011</li> </ul> <p><b>著書</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>気管切開、はじめての人工呼吸管理—基本がわかると先が見える—, 62-68, 2012</li> <li>SLEDD(slow low-efficiency daily dialysis), 日本急性血液浄化学会標準マニュアル, 72-5, 2013</li> <li>心臓手術後の呼吸管理. 徹底ガイド 心臓麻酔Q&amp;A, 231-6, 2013</li> <li>【PACO<sub>2</sub>とPAO<sub>2</sub>は肺胞内でいす取りゲームをしている?】A-aDO<sub>2</sub>が必要な理由がわかった! 呼吸器ケア, 13(5): 25-29, 2015</li> <li>周術期の輸液管理, 臨床麻酔, 41(8): 1129-1136, 2017</li> </ul> <p><b>研究プロジェクト</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成20年度～平成22年度 基盤研究 (C) 研究代表者<br/>HMGB1を標的とした血液浄化による新たな敗血症治療法の開発</li> <li>平成24年度～平成26年度 基盤研究 (C) 研究代表者<br/>重症敗血症における酸化ストレス制御を目的とした新たな血液浄化カラムの開発</li> <li>平成29年度～令和3年度 基盤研究 (C) 研究代表者<br/>人工心肺中の血液浄化アプローチによる心臓手術関連急性腎傷害の新規予防法の開発</li> </ul> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・講師   |  |
| 氏名     | 平野 隆 (Hirano Takashi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分医科大学、1998年6月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 粘膜免疫  |
| 研究キーワード       | 中耳炎、インフルエンザ菌、粘膜免疫   |
| 研究内容          | <p>①急性中耳炎の病態と発症機序の解析<br/> インフルエンザウイルス感染により鼻咽腔粘膜糖鎖構造が変化し、インフルエンザ菌や肺炎球菌の鼻咽腔粘膜への定着性が亢進し、ウイルス感染後の急性中耳炎発症のメカニズムについて解析した。また、中耳での自然免疫応答について、Toll like receptor (TLR) 4欠損マウスを用いた急性中耳炎マウスモデルを確立し、TLR4とTLR2の発現が好中球の細菌貪食能に関与し、TLR4欠損により好中球の自然免疫防御能が低下する事を解明した。また、インフルエンザ菌においてPhosphorylcholineの発現によるphase variationが、鼻咽腔と中耳腔における細菌病原性に影響を与え、Phosphorylcholine発現陰性インフルエンザ菌では、中耳における細菌クリアランスが遅延することを解明している。</p> <p>②滲出性中耳炎の成因と病態の解析<br/> インフルエンザ菌の菌体外膜の主要な成分の1つであるLipooligosaccharide(LOS)を含むエンドキシンを用いた滲出性中耳炎マウスモデルを作成し、サイトカイン発現と滲出性中耳炎発症へ関与について解明している。また、顕微鏡下にてマウスの耳管閉塞とエンドキシンを中耳に注入することにより、慢性滲出性中耳炎マウスモデルの作成に成功し、慢性中耳炎症病態の組織学的解析、慢性時におけるTNF-<math>\alpha</math>などの炎症性サイトカインの関与について解析した。また小児滲出性中耳炎患児の上咽頭より採取したインフルエンザ菌にphase variationを認めることを示し、臨床経過の解析やin vitroでの培養組織を用いた細菌定着実験を行い、Phosphorylcholineの表出が、滲出性中耳炎の遷延化に関与している事を解析している。</p> <p>③慢性中耳炎の病態と局所免疫応答の解析<br/> 耳管閉塞およびインフルエンザ菌投与による慢性中耳感染マウスモデルの作成に成功し、その病態につき組織学的変化ならびに細胞および分子生物学的解析を行い、慢性炎症には制御性T細胞、<math>\gamma</math><math>\delta</math>T細胞、Th1、Th2、及びTh17細胞など様々なリンパ球が関与することを研究し、中耳のインフルエンザ菌慢性感染には、中耳粘膜に存在する制御性T細胞が局所免疫寛容に関与していることを示し、抗CD25抗体分子標的治療の可能性についても研究している。</p> |
| 研究業績・アピールポイント | <p>①今までも粘膜ワクチン開発のため、科学研究費を獲得しており、最近においても以下のように研究代表者として研究資金を獲得している。</p> <p>1) 科学研究費 基盤研究 (C) 平成31年～令和4年<br/> 研究課題名：上下気道粘膜免疫における経年的免疫動態の解析<br/> 研究代表者：平野 隆 研究経費 3,200,000円</p> <p>②学会発表においても、海外を始め研究結果を報告している。<br/> 21st International Symposium on Recent Advances in Otitis Media, Jun 11-12 2021,UK.<br/> Hirano T, Kawano T, Yoshinaga K, Matsunaga T, Suzuk M: Effect of aging mucosal immune responses against nontypeable Haemophilus influenzae in upper airway.</p> <p>③論文においても論文作成や論文作成指導を行っている。<br/> Hirano T. et al. , Interaction between regulatory T cells and antibody-producing B cells for immune responses at the upper respiratory mucosa against nontypeable Haemophilus influenzae: In vitro assay model. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2019;128(6 suppl):45S-51S. 他</p>  |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院放射線科・講師  |  |
| 氏名     | 本郷 哲央 (Hongo Norio)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2007年12月   |   |
| SDGs目標 |    |   |

|               |   |
|---------------|---|
| 研究分野          | 画像診断 血管内治療 画像下治療 Interventional Radiology   |
| 研究キーワード       | 腹部画像診断 CT,MRI 大動脈ステントグラフト 経皮的血管形成術  |
| 研究内容          | <ol style="list-style-type: none"> <li>大動脈血管内治療に関する研究<br/>胸部, 腹部大動脈瘤に対するステントグラフトを主体とした血管内治療の有効性, 安全性向上, 適応の拡大に関する研究 とくに <ul style="list-style-type: none"> <li>・分枝再建を伴うステントグラフト治療 (資料5, 6)</li> <li>・エンドリークに対する予防, 制御 (資料4, 7)</li> <li>・安全性向上に対する試み</li> </ul> </li> <li>血管に於ける画像を用いた新たな低侵襲治療法や器具の開発<br/>Interventional Radiology (画像下治療) における低侵襲治療法に資するカバードステント, 塞栓デバイス, 塞栓法の開発 (資料1, 3)</li> <li>Dual energy CT, MRIを用いた大動脈画像診断法に関する研究<br/>大動脈血管内治療における術前, 術後の画像診断, とくにエンドリークの診断法の開発 (資料2)</li> </ol>  |
| 研究業績・アピールポイント | <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 科学研究費助成事業 研究代表者 本郷 哲央 研究期間 (年度)2019 -2022<br/>盤研究(C) ナノ炭素複合素材と電界紡糸技術を用いた高生体適合性細径カバードステントの開発</li> <li>2) 科学研究費助成事業 研究代表者 本郷 哲央 研究期間 (年度)2014 -2016 基盤研究(C)<br/>Dual energyと超遅延相造影CTによる4次元CT血管造影エンドリーク診断</li> <li>3) Hongo, N. et al.:Vessel Occlusion using Hydrogel-Coated versus Nonhydrogel Embolization Coils in Peripheral Arterial Applications: A Prospective, Multicenter, Randomized Trial. J Vasc Interv Radiol 32:602-609 e601, 2021.</li> <li>4) Hongo, N. et al.:Sac Expansion with Vasa Vasorum-Related Type II Endoleak after Endovascular Aortic Repair Managed by Translumbar Direct Sac Embolization Using Glue. Interventional Radiology 4:27-31, 2019.</li> <li>5) Hongo, N. et al.:Back Table Modification of Bifurcated Endurant Stent Graft to Aorto-Uni-Iliac Stent Graft to Treat Chronic Failure of Endovascular Abdominal Aortic Repair (EVAR) for Abdominal Aortic Aneurysm. Interventional Radiology 1:18-20, 2016.</li> <li>6) Hongo, N. et al.: "Squid-capture" modified in situ stent-graft fenestration technique for aortic arch aneurysm repair. Cardiovasc Intervent Radiol 37:1093-1098, 2014.</li> <li>7) Hongo, N. et al.:Double coaxial microcatheter technique for transarterial aneurysm sac embolization of type II endoleaks after endovascular abdominal aortic repair. J Vasc Interv Radiol 25:709-716, 2014.</li> </ol> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院脳神経内科・講師   |  |
| 氏名     | 増田 曜章 (Masuda Teruaki)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、熊本大学、2018年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | ライフサイエンス、神経内科学、病態検査学   |
| 研究キーワード       | 小径線維ニューロパチー、末梢神経障害、自律神経障害、認知症  |
| 研究内容          | <p>●<u>小径線維ニューロパチーの早期診断および病態評価に有用なサロゲートマーカーの確立</u></p> <p>本疾患群は、A<math>\beta</math>線維およびC線維の障害により自律神経障害や感覚障害が出現し、糖尿病、アミロイドニューロパチー、膠原病、高齢者の原因不明のしびれ (特発性) など様々な末梢神経障害に関与する。本病態は神経伝導検査など従来の検査法では、異常の検出が困難であるため適切な診断がされず可逆的な時期での早期診断および治療介入が遅れることが多い。本病態の評価法として、これまでに自身が確立し、皮神経に着目した病理学的検査法 (論文1) を上回る、さらに独自性の高い、かつ超早期診断のみならず、進行度の評価、正確な治療効果判定にも活用できるサロゲートマーカーの開発を目指す。(論文3, 4)</p> <p>●<u>自律神経障害の客観的評価法および治療法の開発</u></p> <p>自律神経系は臓器および器官の制御を行い、生体の恒常性の維持に重要な役割を果たす。様々な疾患に伴う自律神経の異常は、全身に極めて多彩な症状を引き起こし、QOLを大きく損なう。神経内科領域の疾患を中心に、病態に応じた多角的な自律神経機能検査法の開発および治療法の開発を目指す。(論文2, 著書1)</p> <p>●<u>認知症の早期診断に有用なバイオマーカーおよび治療法の開発</u></p> <p>アルツハイマー病および軽度認知障害を中心に、認知症発症リスクを予知するバイオマーカーの検索および治療法の開発を目的として、臨床研究および基礎研究を行う。(論文5)</p>   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Masuda T, Ueda M, Suenaga G, et al. Early skin denervation in hereditary and iatrogenic transthyretin amyloid neuropathy. <i>Neurology</i> 88: 2192-2197, 2017.</li> <li>Ikeda T, Masuda T, Ueda M, et al. Unwanted road to anaemia in transthyretin familial amyloid polyneuropathy may continue irrespective of tafamidis treatment. <i>Ann Clin Biochem</i> 55: 571-575, 2018.</li> <li>Masuda T, Ueda M, Kitajima M, et al. Morphology of lumbosacral dorsal root ganglia and plexus in hereditary transthyretin amyloidosis. <i>Neurology</i> 91: e1834-e1835, 2018.</li> <li>Misumi Y, Ueda M, Masuda T, et al. Characteristics of acquired transthyretin amyloidosis: A case series and review of the literature. <i>Neurology</i> 93: e1587-e1596, 2019.</li> <li>Inoue Y, Masuda T, Misumi Y, et al. Metformin attenuates vascular pathology by increasing expression of insulin-degrading enzyme in a mixed model of cerebral amyloid angiopathy and type 2 diabetes mellitus. <i>Neurosci Lett</i> 25: 762:136136, 2021.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>増田 曜章, 安東 由喜雄. 家族性アミロイドポリニューロパチーと自律神経障害. <i>自律神経</i> 55: 81-84, 2018.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年: 日本自律神経学会 学会賞</li> <li>2018年: The XVIth International Symposium on Amyloidosis Best Poster Award</li> <li>2016年: 第69回日本自律神経学会総会 優秀演題賞</li> </ol> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院整形外科・講師  |  |
| 氏名     | 宮崎 正志 (Miyazaki Masashi)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2008年9月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 脊椎脊髄外科学、整形外科   |
| 研究キーワード       | 脊椎脊髄外科・後縦靭帯骨化症、側弯症、骨粗鬆症、脊椎固定、骨癒合   |
| 研究内容          | <p><b>臨床研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 脊椎固定術における骨癒合研究と骨粗鬆症薬の重要性<br/>骨粗鬆症薬は3つの側面を担っている。1つは椎体骨折予防のための骨粗鬆症の治療薬としての側面である。後の2つは骨粗鬆症患者に脊椎固定術を行う際に、脊椎インストルメントによる固定性の向上と骨癒合の向上を狙うものである。我々は様々な骨粗鬆症薬の脊椎固定術における骨癒合同上効果を研究し臨床的意義を検討している。</li> <li>● 遺残性側弯症の病態と治療 高難易度症例に対する治療戦略<br/>成人期まで遺残した側弯症は、適切な治療や定期的な経過観察を受けておらず、有症状を訴えて来院することが多い。若年者の側弯症と比較して主カーブが大きく、rib humpが重篤で体幹や肩のバランス不全が認められる。主カーブの進行に関連する様々な合併症を引き起こし、心肺機能の低下や胃腸障害を呈している場合があり、思春期側弯例と比較すると問題点は多い。我々は遺残性側弯症の病態と、各種解離術と矯正術の手技的な安全性を確立するために様々なモダリティを用いて研究している。</li> </ul> <p><b>基礎研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究(C)<br/>ラット脊椎固定モデルにおけるBMPと抗スクレロチン抗体の相互効果の検討：研究代表者</li> </ul>   |
| 研究業績・アピールポイント | <p><b>研究業績</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Sato S, Kataoka M, Tsumura H. Analysis of the reciprocal changes in upper cervical profile and the risk factors for cervical sagittal imbalance after laminoplasty for ossification of the posterior longitudinal ligament of the cervical spine. Clin Neurol Neurosurg. 2020</li> <li>2. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Analysis of Reciprocal Changes in Upper Cervical Profiles after Posterior Spinal Fusion with the Simultaneous Double Rod Rotation Technique for Adolescent Idiopathic Scoliosis. Orthopaedics &amp; Traumatology: Surgery &amp; Research.2020</li> <li>3. <b>Miyazaki M*</b>, Abe T, Ishihara T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Cervical alignment after single-level anterior cervical corpectomy and fusion using autologous bone graft without spinal instrumentation for cervical pyogenic spondylitis. Eur J Orthop Surg Traumatol. 2019</li> <li>4. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. The Position of the Spinal Cord Relative to the Vertebrae in Adolescent Idiopathic Scoliosis. Medicine (Baltimore). 2019</li> <li>5. <b>Miyazaki M*</b>, Ishihara T, Abe T, Kanezaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Effect of intraoperative position in single-level transforaminal lumbar interbody fusion at the L4/5 level on segmental and overall lumbar lordosis in patients with lumbar degenerative disease. Medicine (Baltimore). 2019</li> </ol> <p><b>受賞歴</b></p> <p>平成20年 10月 2008 North American Spine Society Outstanding Paper Award<br/>平成23年 9月 第6回日本脊椎脊髄病学会Asia Traveling Fellowship選出<br/>平成28年 3月 第2回運動器疾患論文学術最優秀賞</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院呼吸器外科・講師   |  |
| 氏名     | 宮脇 美千代 (Miyawaki Michiyo)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2009年6月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|               |  |
|---------------|--|
| 研究分野          | 腫瘍外科学  |
| 研究キーワード       | 肺癌、胸部悪性腫瘍、低侵襲手術  |
| 研究内容          | <p>●呼吸器外科領域の低侵襲手術の開発<br/>胸腔鏡手術やロボット支援下手術などの低侵襲手術は患者さんへの生活の質(Quality of Life: QOL)の向上に寄与する。手術の正確さや安全性を第一に考えた術式開発をすすめている。また、若手外科医への低侵襲手術の教育方法の研究も進めている。</p> <p>●縦郭腫瘍,胸壁腫瘍の治療開発<br/>縦隔、胸壁腫瘍の低侵襲手術の術式の開発と、悪性腫瘍に対する殺細胞性抗癌剤、分子標的薬などの新規薬物の臨床試験に参画し、新たな標準治療のエビデンス構築と治療成績の向上に努めている。</p> <p>●胸部悪性腫瘍に対する治療開発とエビデンスの構築<br/>胸部悪性腫瘍、特に局所進行肺癌の手術成績を改善するために、手術前後の薬物/放射線治療による集学的治療に関する全国的な臨床試験に参画している。特に薬物療法は、従来の殺細胞性抗癌剤に加え、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤などの新規薬物のエビデンスの構築に努めている。</p>  |
| 研究業績・アピールポイント | <p>●縦郭腫瘍,胸壁腫瘍の治療開発 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年、Noda D, ..., Miyawaki M, et.al. Resection and postoperative radiation therapy for desmoid fibromatosis of the chest wall in a young woman. Surg Case Rep, 7(1):28</li> <li>2022年、Miyawaki M, et.al. Thymoma-associated myasthenia gravis coexisting with myotonic dystrophy: a case report. Surg Case Rep, 7(1):159</li> </ol> <p>●胸部悪性腫瘍に対する治療開発とエビデンスの構築 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年、Osoegawa A, ..., Miyawaki M, et.al. The positive relationship between <math>\gamma</math>H2AX and PD-L1 expression in lung squamous cell carcinoma. In Vivo. 32(1):171-177</li> <li>2018年、Hashimoto T, ..., Miyawaki M, et.al. Intratumoral heterogeneity of copy number variation in lung cancer harboring L858R via immunohistochemical heterogeneous staining. Lung Cancer. 124:241-247</li> <li>2018年、Osoegawa A, ..., Miyawaki M, et.al. Acquired resistance to an epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) in an uncommon G719S EGFR mutation. Invest New Drugs. 36(6):999-1005</li> <li>2022年、Okamoto T, Miyawaki M, et.al. Clinical significance of part-solid lung cancer in the eighth edition TNM staging system. Interact Cardiovasc Thorac Surg. 34(2): 219-226</li> </ol> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

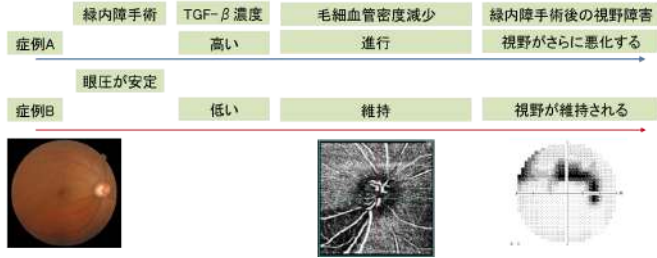
|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院眼科・講師  |  |
| 氏名     | 横山 勝彦 (Yokoyama Katsuhiko)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2012年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

研究分野 眼科学

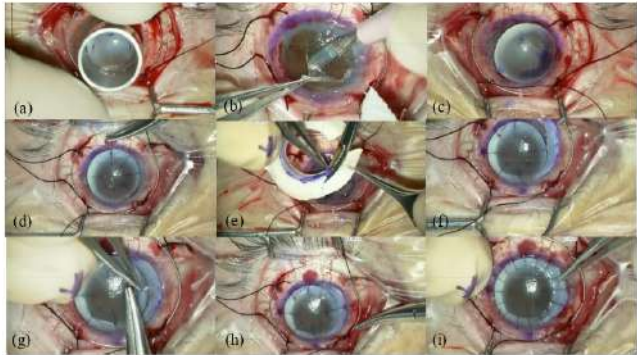
研究キーワード 緑内障、角膜

研究内容

1) 落屑緑内障発症における細胞外マトリックスと網膜表層微少循環の関与：落屑緑内障の発症および進行に眼圧非依存の因子 (TGF-β および網膜微少循環など) が含まれることを同定し、眼圧下降に依存しない新規薬物療法の開発を行う。



2) 角膜疾患に対する新規外科的治療の開発：重症角膜疾患における外科的治療である角膜移植において、手術侵襲が少なく、術後の合併症を軽減するための手術方法の開発を行う。





研究業績・アピールポイント 研究業績；  
論文

- 1) The PI3K/Akt pathway mediates the expression of type I collagen induced by TGF-β2 in human retinal pigment epithelial cells. Yokoyama K, Kimoto K, Itoh Y, Nakatsuka K, Matsuo N, Yoshioka H, Kubota T. Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol. 250(1):15-23.2012.
- 2) Deep Anterior Lamellar Keratoplasty and Peripheral Lamellar Keratoplasty for a Case of Severe Peripheral Ulcerative Keratitis. Yokoyama K, Nakamura R, Otsuka T, Kimoto K, Kubota K. Case Reports in Ophthalmology, 13:9-16 .2022.



総説

- 1) 【最新ツールで診療力アップ 緑内障診療トピック】 OCT Angiographyと緑内障  
眼科グラフィック10巻3号：282-291, 2021

|               |  |   |
|---------------|--|---|
| 所属・職位         | 医学部附属病院臨床薬理センター・講師   |  |
| 氏名            | 和久田 浩一 (Wakuda Hirokazu)   |   |
| 取得学位          | 博士 (医療薬学)、静岡県立大学、2012年3月   |   |
| SDGs目標        |    |   |
| 研究分野          | 臨床薬理学・薬理学・薬物動態学  |   |
| 研究キーワード       | PBPKモデル・ドラッグリポジショニング・メタアナリシス・P-糖タンパク質  |   |
| 研究内容          | <p>薬物動態学と基礎薬理学のバックグラウンドを持ち、それを活かして臨床薬理学の研究に取り組んでいる。現在の研究テーマは以下の3つである。</p> <p>① <b>生理学的薬物速度論 (Physiologically based pharmacokinetics: PBPK) モデルによる研究</b><br/> Covid-19の治療薬開発を目指して、Transmembrane protease, serine 2 (TMPRSS2) の阻害薬であるナファモスタットおよびカモスタットについてPBPK解析を行った。本研究の結果は、下記の学会で発表した。(仁田脇 麻衣, 和久田 浩一, 他. 第41回 日本臨床薬理学会学術総会 2020., Wakuda H, <i>et al.</i> The American Society for Clinical Pharmacology and Therapeutics (ASCPT) Annual Meeting 2021.)</p> <p>② <b>ドラッグリポジショニングの研究</b><br/> 非アルコール性脂肪肝炎 (Nonalcoholic steatohepatitis: NASH) の治療薬は未だ無い。特発性肺線維症の治療薬にニンテダニブがある。ニンテダニブは線維化に関わるTGF-<math>\beta</math>を阻害するため、NASHの治療薬としてドラッグリポジショニングを目指して研究を行った。(Wakuda H, <i>et al.</i> 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology, 2018., Susutlertpanya W, Wakuda H, <i>et al.</i> 第70回 日本薬理学会 北部会 2019.)</p> <p>③ <b>メタアナリシスを用いた研究</b><br/> 鎮痛薬であるヒドロモルフォンとオキシコドンの鎮痛効果および副作用に関してメタアナリシスにより解析した。(和久田 浩一, 他. 第4回 日本臨床薬理学会 東海・北陸地方会 2019.)</p> <p><u>2022年1月よりUniversity of California, San Francisco(UCSF)LZ Benet教授のラボに留学中。</u></p>                     |   |
| 研究業績・アピールポイント | <p>・論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Susutlertpanya W, <u>Wakuda H</u>, Otani N, Kuramoto T, Li L, Kuranari M, Sekiguchi A, Kudo H, Uchida T, Imai H, Uemura N. Histological evaluation of nintedanib in non-alcoholic steatohepatitis mice. <i>Life sciences</i> 228: 251-257, 2019.</li> <li>Otani N, <u>Wakuda H</u>, Imai H, Kuranari M, Ishii Y, Ito Y, Okubo A, Ogawa O, Takeda K, Ohyama T, Hasunuma T, *Uemura N. No Effect of Digoxin on Rosuvastatin Pharmacokinetics in Healthy Subjects: Utility of Oita Combination for Clinical Drug-Drug Interaction Study. <i>Clinical and translational science</i>. 12(5): 513-518, 2019.</li> <li>*<u>Wakuda H</u>, Okura T, Maruyama-Fumoto K, Kagota S, Ito Y, Miyauchi-Wakuda S, Otani N, Uemura N, Yamada S, Shinozuka K. Effects of Anticholinergic Drugs Used for the Therapy of Overactive Bladder on P-Glycoprotein Activity. <i>Biological &amp; pharmaceutical bulletin</i> 42(12): 1996-2001, 2019.</li> </ol> <p>・特許<br/> 特許第7061310号 慢性脂肪性疾患の予防および治療用医薬 上村 尚人, 大谷 直由, <u>和久田 浩一</u></p> |   |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院麻酔科・助教   |  |
| 氏名     | 安部 隆国 (Abe Takakuni)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2005年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 麻酔科学、集中治療医学   |
| 研究キーワード            | 集中治療、急性腎傷害、腎代替療法、腎バイオマーカー   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●急性腎傷害患者に対する持続的腎代替療法の終了基準の模索<br/>重症急性腎傷害(AKI)に対する治療法として持続的腎代替療法(CRRT)が普及し、有効な治療手段として確立されているが、CRRTを終了する適切なタイミングについての研究報告は少ない。CRRTを終了すべき適切なタイミングを知ることは治療対象患者の転帰の改善のみならず医療経済面においても非常に重要な意義を持つと考えられており、CRRT施行患者における腎機能評価法を模索し、AKIに対するCRRTの適切な終了基準を明らかにすることで患者転帰の改善や医療コスト削減につなげることを研究目的としている。</p> <p>●平成29年5月 日本集中治療医学会第1回九州支部学術集会 最優秀演題賞受賞<br/>「敗血症性急性腎傷害に対する腎代替療法の離脱基準に関する後方視的検討」</p> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院肝疾患相談センター・助教   |  |
| 氏名     | 荒川 光江 (Arakawa Mie)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2011年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 肝疾患・自己免疫性肝障害  |
| 研究キーワード            | 肝炎・自己免疫性肝炎・原発性胆汁性胆管炎  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>自己免疫性肝障害の臨床研究を主にしています。<br/>また、肝疾患相談センターでは、肝疾患診療連携拠点病院として大分県とともに肝炎・肝がん撲滅運動の仕事をさせていただいております。</p> <p>The effects of branched-chain amino acid granules on the accumulation of tissue triglycerides and uncoupling proteins in diet-induced obese mice. Endocrine Journal (0918-8959)58巻3号 Page161-170(2011.03)<br/>先天性肝線維症に増大する限局性結節性過形成類似病変を合併した1例. 肝臓 (0451-4203)56巻9号 Page461-468(2015.09)</p> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院精神科・助教   |  |
| 氏名     | 泉 寿彦 (Izumi Toshihiko)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2014年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 精神神経医学  |
| 研究キーワード            | 気分障害、双極性障害、サングラス、非薬物療法  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | 双極性障害の治療においてサングラス搔痒による抗躁効果に関する研究<br>双極性障害の治療には暗室に長時間滞在する暗闇療法があるが、患者に負担が大きい。サングラスの装用により光を制限することで抗躁効果が得られる。昼間に灰色サングラスを装着することで、オレンジ色サングラスや透明サングラスよりも強い抗躁効果が発揮されるかについて研究する。 |

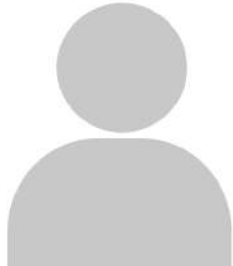

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院血液内科・助教  |  |
| 氏名     | 井谷 和人 (Itani Kazuhito)  |   |
| 取得学位   | 学士 (理学)、大阪大学、2002年3月 学士 (医学)、大分大学、2010年3月   |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 血液学  |
| 研究キーワード            | 造血幹細胞移植、造血器腫瘍  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●実診療での示唆に富む症例や新しい知見についての報告を実施(学会発表 1-5)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2011年, 同種骨髄移植後の血球貪食症候群に対してトロンボモジュリン・アルファを投与したAML症例, 第33回 日本造血細胞移植学会総会 学会発表</li> <li>2013年, 原発性形質細胞白血病の同種移植後再発に対してDLIにBortezomibを併用した1例, 第35回 日本造血細胞移植学会総会 学会発表</li> <li>2013年, Report on nilotinib treatment for chronic myeloid leukemia associated with diabetes mellitus, 第75回 日本血液学会学術集会 学会発表</li> <li>2016年, WT-1 mRNA値のモニタリングによる同種造血幹細胞移植後再発の予測, 第38回 日本造血細胞移植学会総会 学会発表</li> <li>2018年, Efficacy of ponatinib dose increment in a Ph+ALL patient with compound mutation involving T315I, 第80回 日本血液学会学術集会 学会発表</li> </ol> |


# 医学部附属病院

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院整形外科・助教  |  |
| 氏名     | 岩崎 達也 (Iwasaki Tatsuya)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2015年6月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

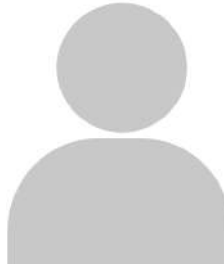

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 小児整形外科学   |
| 研究キーワード            | 小児 骨関節  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>小児の骨関節疾患に関する研究</p> <p>我が国の少子超高齢化社会において未来を担う子供達の健康維持は非常に大切な分野です。小児は成人と違い成長が起こるため、成長に伴って変形や脚長差、また小児特有の疾患もしくは病態を持っています。骨折後や骨髄炎後に過成長を生じたり、骨系統疾患では特有の骨形態の異常や変形の進行が見られます。私は特にこのような骨の疾患特異性やモデリング、骨成長のメカニズムについて興味を持っており小児骨関節疾患の治療や臨床的見地から解明することを目的として臨床研究を行っています。</p> <p>所属学会：日本整形外科学会<br/>日本小児整形外科学会<br/>日本リハビリテーション医学会<br/>日本リウマチ学会等</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院形成外科・助教  |  |
| 氏名     | 上原 幸 (Uehara Miyuki)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2020年12月   |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 顔面神経麻痺治療  |
| 研究キーワード            | 顔面神経麻痺 人工神経 同種神経  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <ul style="list-style-type: none"> <li>顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の臨床研究<br/>陳旧性顔面神経麻痺に対する新しい治療法を開発している。その臨床上的有効性を前向き検討行っており、すでにその成果を国内外の学会や学会誌に報告している。</li> <li>顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の基礎研究<br/>動物モデルにて、新しい末梢神経再建手術法を開発を行っている。その人実験結果を国内外の学会論文に報告している。</li> <li>末梢神経再建における人工神経の基礎研究<br/>近年使用されるようになった人工神経の有効性について、動物モデルにて検討している。さらに新たな人工神経の開発を研究している。</li> <li>末梢神経再建における人工神経と幹細胞併用法の研究<br/>人工神経移植のみでは、今まで行っていた自家神経移植と同等の神経再生能力がないことが分かっている。現在我々は、人工神経に脱落乳歯から採取した歯髄幹細胞を移植して、これにより神経再生能力が向上するかどうかの検討を行っている。<br/>Uehara M, Shimizu F, Wu W, Oatari M. The distal stump of the intramuscular motor branch of the obturator nerve is useful for the reconstruction of long-standing facial paralysis using a double-powered free gracilis muscle flap transfer. J Craniofac Surg 29(2): 476-481, 2017. (IF 0.788)</li> </ul> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院麻酔科・助教   |  |
| 氏名     | 内野 哲哉 (Uchino Tetsuya)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、1999年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 麻酔科学   |
| 研究キーワード            | 末梢神経、末梢動脈、中心静脈、カテーテル留置、末梢神経ブロック  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>安全な血管カテーテル留置や神経ブロックに関する臨床解剖学的研究を行っている。</p> <p>①安全な中心静脈カテーテル留置や動脈カテーテル留置の際に重要な局所解剖学について、特に末梢静脈ルート確保時や橈骨動脈カテーテル留置時に問題となるSuperficial radial arteryの臨床解剖学的特徴についての検討。</p> <p>②臨床解剖学からみた各種神経ブロックにおける局所解剖学および臨床研究。</p> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院皮膚科・助教   |  |
| 氏名     | 梅木 真由子 (Umeki Mayuko)   |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2006年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 皮膚科学   |
| 研究キーワード            | 皮膚悪性腫瘍   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>皮膚悪性腫瘍の診断、治療</p> <div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;"> </div> <div style="flex: 1; padding-left: 20px;"> <p>爪下悪性黒色腫は他の悪性黒色腫に比べて生命予後が悪いことが知られている。その要因として、初期病変の爪甲色素線条についての良悪の鑑別が困難であることが挙げられる。我々は、当科で経験した症例をもとに、爪甲色素線条における悪性黒色腫の鑑別アルゴリズム案を作成した。</p> <p>図引用：西日本皮膚科 72巻2号 Page101-105(2010.04)</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">図3 SMM 鑑別アルゴリズム(案)</p> |



## 医学部附属病院

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・助教   |  |
| 氏名     | 梅本 真吾 (Umemoto Shingo)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2016年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |




|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 粘膜免疫学   |
| 研究キーワード            | 粘膜ワクチン、経鼻ワクチン、RSウイルス、肺炎球菌、インフルエンザ菌  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>● 粘膜免疫・粘膜ワクチンに関する研究</p> <p>局所粘膜免疫を介した免疫は、抗原特異的な免疫応答を全身系のみならず粘膜局所にも誘導可能であることが知られている。しかしながら、粘膜ワクチンについて臨床応用がなされているのはごく一部に限られている。</p> <p>私はこれまで新しい経鼻ワクチンデリバリーシステムを用いた上気道病原菌（肺炎球菌、インフルエンザ菌）に対するワクチンの研究に携わっており、現在はRSウイルスに対する経鼻ワクチンの研究、および広く腸管まで含めた粘膜免疫の研究をすすめている。</p> <p>My Bibliography:<br/> <a href="https://www.ncbi.nlm.nih.gov/myncbi/1RKmR5sWassQ9g/bibliography/public/">https://www.ncbi.nlm.nih.gov/myncbi/1RKmR5sWassQ9g/bibliography/public/</a></p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院精神科・助教   |  |
| 氏名     | 衛藤 真樹 (Eto Masaki)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、宮崎大学、2015年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |



|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 精神医学   |
| 研究キーワード            | 気分障害、統合失調症、認知症、音楽療法、非薬物療法  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>気分障害、統合失調症、認知症など、様々な精神疾患を持つ病棟患者を対象に音楽療法を実施している。</p> <p>精神疾患に対する非薬物療法として、音楽療法の有効性についてはかねてより指摘されているが、研究としては少なく、まだ未知の部分が多い分野である。</p> <p>今後は、精神疾患に対する音楽療法の有効性に関する臨床研究に発展させたいと考えている。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救急救命センター（消化器外科）・助教   |  |
| 氏名     | 圓福 真一郎 (Empuku Shinichirou)   |   |
| 取得学位   | 博士（医学）、大分大学、2016年3月   |   |
| SDGs目標 |  |   |



|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 直腸癌  |
| 研究キーワード            | 放射線化学療法  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | 局所進行直腸癌に対する術前化学放射線療法(CRT)の治療成績と効果予測について研究を行いました。これは多施設共同第II相臨床試験(OITA-Trial)としてわれわれのグループが主として行った研究です。背景としては進行直腸癌に対するCRTは欧米では標準とされ日本でも有用性が注目されています。ただし患者によって治療効果にばらつきがあることが問題となっています。そこで、われわれは局所進行直腸癌に対する経口抗がん剤を用いたCRTの第II相前向き試験を行い、またCRTに対する効果予測因子の同定を試みました。術前CRTを受けた直腸癌37例を対象とし、S-1/RTを施行。CRT前生検材料は26例を対象とし、アレイデータをもとに主成分解析を行った結果、術前CRTは32/37例で完遂し奏効率は56.8%であった。組織学的奏効率は48.6%。G3以上の有害事象は4/36例であった。RO切除率は94.6%だった。また治療効果予測遺伝子群を抽出できた。S-1/RTによる術前CRTは認容性が高く、短期成績は良好であり、今回抽出した遺伝子群は、治療効果予測因子として有用であると考えられた。今回の研究に端を発し、さらに遺伝子群の検索を続けることにより、今後将来的に患者個人に最も効果の期待できる個別化された治療が提供できるようになると思われる。 |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院眼科・助教  |  |
| 氏名     | 大木 玲子 (Oki Ryoko)   |   |
| 取得学位   | 博士（医学）、大分大学、2017年9月   |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 小児眼科   |
| 研究キーワード            | 斜視、不同視弱視、光干渉断層計  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>1)遠視性不同視弱視では弱視眼の眼球形態が健常眼と異なり、眼軸長が短く、視神経乳頭径や陥凹が小さく、脈絡膜厚が厚い。このような眼球後部の形態は、眼鏡の装用開始をきっかけに脈絡膜を主として変化する。弱視治療法の違いにより眼球後部形態の経年変化に差があるか、光干渉断層計を使用して調査する。</p> <p>2)外斜視手術では広く共通した定量表を用いて内・外直筋の術量を決定するが、術効果が乏しく術後に著しく低矯正となる症例がある。眼窩形状・外眼筋の走行・プリーの位置、あるいは術中所見からみる外眼筋性状が手術効果に及ぼす影響を研究する。</p> <p>1)安達麻衣, 門田智恵美, 安田昌子, 田村弘一郎, 大木玲子, 久保田敏昭<br/>不同視弱視症例における立体視の発達. 眼科臨床紀要2021;14(3) : 141-145</p> <p>2)松永建司, 伊東智恵美, 安田昌子, 田村弘一郎, 本村由香, 大木玲子, 久保田敏昭<br/>急性内斜視10例におけるPrism adaptation testと手術成績. 眼科臨床紀要2019;12(6) : 494-496</p> <p>3)Oki R., Yamada K., Nakano S., Kimoto K., Yamamoto K., Kondo H., Kubota T. :<br/>A Japanese family with autosomal dominant oculocutaneous albinism type 4, Investigative Ophthalmology &amp; Visual Science, 2017;58:1008-1016.</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院集中治療部・助教   |  |
| 氏名     | 大地 嘉史 (Ohchi Yoshifumi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2019年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |



|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 集中治療医学、麻酔科学  |
| 研究キーワード            | 急性血液浄化、人工呼吸、敗血症  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>集中治療専門医として重症患者管理の臨床及び基礎研究に取り組んでいる。集中治療患者の多くが多臓器不全を呈しており様々な臓器補助手段を必要とすることから、急性血液浄化や人工呼吸、膜型人工肺といった臓器補助装置を研究テーマとしている(Ther Apher Dial, 23(2):173-179, 2019, 人工呼吸, 37:236-7, 2020, 他)。さらに、様々な治療薬物が臓器補助装置に影響を受けることから、臓器補助装置使用時の薬力学・薬物動態について当院薬剤部との共同研究を進めている(J Pharm Biomed Anal. 113764, 2020, Clin Biochem. 90:40-9, 2021, 他)。</p> <p>(※業績詳細⇒<a href="https://researchmap.jp/_O_Y">https://researchmap.jp/_O_Y</a>)</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院脳神経外科・助教   |  |
| 氏名     | 大西 晃平 (Oonishi Kouhei)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分医科大学、2011年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 脳神経外科学  |
| 研究キーワード            | 脳腫瘍、脳血管障害、脊髄外科  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>研究内容：脳腫瘍の分子生物学と臨床への応用</p> <p>これまでの研究では脳腫瘍の増殖や血管新生とフリーラジカルの一種である一酸化窒素の合成酵素 (Nitric oxide synthase : NOS)との関連、NOS阻害剤の増殖抑制効果を報告したものは散見されるが、臨床的意義や治療へ発展性を明確にするには至っていない。実際に、様々な悪性度の脳腫瘍患者の組織で、酸化ストレスの関連や腫瘍予後への影響を検討する。</p> <p>研究業績：Onishi K, Kamida T, Momii Y, Abe T, Fujiki M. The clinical and pathological significance of nitric oxide synthase in human pituitary adenomas: a comparison with MIB-1. Endocrine. 46(1): 154-9, 2014</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院産科婦人科・助教   |  |
| 氏名     | 岡本 真実子 (Okamoto Mamiko)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2015年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 医学  |
| 研究キーワード            | 子宮内膜症、マイクロRNA、生殖医学  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●子宮内膜症において発現が減少しているmiR-199a-3pの役割に関する研究</p> <p>子宮内膜症病変は、月経周期に伴って出血、凝血、吸収を繰り返して癒痕化し、病態が進行する。これまでの研究から、子宮内膜症の病態形成におけるエピジェネティクス異常の役割が注目されているが、その詳細なメカニズムに関しては未だ不明な点が多い。</p> <p>本研究では、以前に我々が子宮内膜症細胞において発現が減少していることを報告したマイクロRNAに着目し、① 子宮内膜症におけるマイクロRNAの標的遺伝子の網羅的解析、② 網羅的解析によって見出された候補遺伝子の役割に関する分子生物学的および細胞生物学的検討、③ マイクロRNA標的遺伝子を制御する薬剤の子宮内膜症治療薬としての有用性についての検討を行う。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院消化器内科・助教   |  |
| 氏名     | 小川 竜 (Ogawa Ryo)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2021年12月   |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 医学 消化器内科学   |
| 研究キーワード            | ヘリコバクター・ピロリ、食道アカラシアなど   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>ヘリコバクター・ピロリに関する研究</p> <p>Ogawa R, Okimoto T, Kodama M, Togo K, Fukuda K, Okamoto K, Mizukami K, Murakami K. Changes in Gastric Mucosal Glycosylation Before and After Helicobacter pylori Eradication Using Lectin Microarray Analysis. Turk J Gastroenterol. 2022 Feb;33(2):88-94.</p> <p>食道アカラシアに関する研究</p> <p>Shiwaku H, Sato H, Shimamura Y, Abe H, Shiota J, Sato C, Ominami M, Sakae H, Hata Y, Fukuda H, Ogawa R, Nakamura J, Tatsuta T, Ikebuchi Y, Yokomichi H, Hasegawa S, Inoue H. Risk factors and long-term course of gastroesophageal reflux disease after peroral endoscopic myotomy: A large-scale multicenter cohort study in Japan. Endoscopy. 2022 Feb 16.</p> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等


|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院手術部・助教   |  |
| 氏名     | 小山 淑正 (Oyama Yoshimasa)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2014年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 麻酔学、集中治療医学   |
| 研究キーワード            | 概日リズム、敗血症、炎症、麻酔、集中治療   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>概日リズムと炎症制御方法の研究</p> <p>概日リズムは、覚醒、ホルモン分泌、認知などの生理的機能を調整しており、生体の恒常性維持に欠かせないものである。概日リズムの乱れは高血圧、糖尿病、心筋梗塞発症といった炎症性疾患に影響を与えるだけでなく、炎症性疾患自体が概日リズムを乱し、病態を悪化させるといった悪循環を形成することが知られている。</p> <p>概日リズムの是正により、いかに病態改善できるかを主な研究テーマとして取り組んでいる。</p> <p><a href="https://researchmap.jp/yoyama">https://researchmap.jp/yoyama</a></p> |




|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院産科婦人科・助教   |  |
| 氏名     | 甲斐 健太郎 (Kai Kentaro)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2014年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 婦人科腫瘍学、生殖内分泌学   |
| 研究キーワード            | 神経内分泌腫瘍、子宮内膜症   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 卵巣神経内分泌腫瘍の病理学的細分類に関する研究           <p>神経内分泌腫瘍の診断において、臓器横断的病理診断が導入されつつある。しかし、卵巣では依然カルチノイドや小細胞癌という名称が使われている。そこで、卵巣にも臓器横断的病理分類が可能かを検証し、将来的には卵巣神経内分泌腫瘍にも臓器横断的治療を導入したい。<b>Kai</b> et al. <i>Neuroendocrinology</i>. 2021. PMID: 32097950</p> </li> <li>● 子宮内膜症の病態形成の解明に関する研究           <p>子宮内膜症は、生殖年齢女性の約10%が罹患し、病勢が進行すると骨盤内環境の悪化のため不妊を来す。しかし、現行の診断法では、発症から診断まで約10年の遅延が生じる。そこで、miRNAと子宮内膜症の病態形成との関連を検証し、早期診断・治療へ応用したい。Nasu, Aoyagi, Zhu, Okamoto, Yano, <b>Kai</b> et al. <i>Med Mol Morphol</i>. 2022. PMID: 34463829</p> </li> </ul> |







|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院手術部・助教   |  |
| 氏名     | 甲斐 真也 (Kai Shinya)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2006年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 麻酔学   |
| 研究キーワード            | バランス麻酔  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | 各種麻酔薬や鎮痛薬の一部には、臓器保護効果があることが示されている。しかしながら実際の麻酔においては、麻酔薬や鎮痛薬の組み合わせ、適切な麻酔深度を維持することで麻酔を行っており、これらを組み合わせることでの有効性について検討した報告は少ない。そこで、我々は吸入麻酔薬、麻薬性鎮痛薬の各種組み合わせによる臓器保護効果の有無について、肝虚血再灌流障害モデルを使用し検討を行っている。 |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・助教   |  |
| 氏名     | 門脇 嘉宣 (Kadowaki Yoshinori)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2020年12月   |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 耳科学 粘膜免疫学 感染症  |
| 研究キーワード            | 中耳炎 真珠腫 ホスホリルコリン   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>① 中耳炎に関する研究<br/>中耳炎を引き起こす細菌が、生体反応によってどのように除去されるかを研究しています。<br/>論文1: Phase variation with altering phosphorylcholine expression of nontypeable Haemophilus influenzae affects bacteria clearance and mucosal immune response in the middle ear and nasopharynx (Auris Nasus Larynx, 2021)</p> <p>② 中耳真珠腫に関する研究<br/>中耳真珠腫の疫学や、また手術の前に行う画像検査をどのように扱うかを検討してきました (論文 2,3,4)。<br/>論文2: <a href="#">A novel view of computed tomography images similar to the visual field of otologic surgeons (Laryngoscope Investigative Otolaryngology, 2021)</a><br/>論文3: 疫学的観点から見た先天性真珠腫: 発生率と傾向 (日本耳鼻咽喉科学会会報, 2022 in press)<br/>論文4: 耳科手術体位でみる矢状断 CT 画像 — 学生教育への活用の試み — (日本耳鼻咽喉科学会会報, 2018)</p> |




## 医学部附属病院

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救命救急センター（整形外科）・助教  |  |
| 氏名     | 金崎 彰三 (Kanezaki Shozo)  |   |
| 取得学位   | 博士（医学）、大分大学、2019年9月   |   |
| SDGs目標 |    |   |


|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 整形外科学   |
| 研究キーワード            | 整形外科外傷、骨盤骨折、寛骨臼骨折、骨癒合   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●ラット大腿骨モデルを用いたテリパラチドとBMPの相乗効果に関する研究<br/>         確率されたラット大腿骨骨折モデルを用いて、BMP-2単独よりもPTHを併用することで骨形成を促進させることを示した (J Orthop Surg Res, 14(1): 403, 2019)</p> <p>●寛骨臼骨折手術におけるinfra-acetabular screwの挿入経路に関する研究<br/>         CTデータを用いて日本人におけるinfra-acetabular screwの挿入経路の大きさなど特徴について検討した。約3割の患者ではinfra-acetabular screwを挿入するのに十分な経路がないことを示した。(Arch Orthop Trauma Surg, 140(3): 359-364, 2020)</p> <p>以上のように主にラットを用いた骨形成に関する基礎研究も行いながら、骨盤・寛骨臼骨折に関する臨床研究も行っています。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院脳神経外科・助教   |  |
| 氏名     | 川崎 ゆかり (Kawasaki Yukari)  |   |
| 取得学位   | 学士（医学）、大分医科大学、2004年3月   |   |
| SDGs目標 |  |   |


|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 脳神経外科学  |
| 研究キーワード            | theta burst stimulation, long-term potentiation, neurobehavior, subarachnoid hemorrhage, motor-evoked potential   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>顕著な現代医学の進歩にもかかわらず、既存の方法では異常を同定・評価できないものの一つに神経学的無症候・潜在的病態がある。客観的評価が困難であるため、無症候性病態はその影に潜む加療を要する重大な病態を見逃す恐れを有する一方、その数は激増の一途をたどる。この問題は本病態の臨床的評価指標を待たずして客観的評価指標の観点からその大きな糸口を掴むことができる可能性があり、くも膜下出血後の症候性脳血管攣縮予測可否検討を行っている。くも膜下出血において発現する脳保護・可塑性誘導に有効な遺伝子が発現する条件と同一の刺激条件が、臨床上も同様な脳の再教育効果を有するか否かを、神経生理学的手法で評価・解析する。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院総合臨床研究センター・助教  |  |
| 氏名     | 倉成 正恵 (Kuranari Masae)  |   |
| 取得学位   | 薬学士、近畿大学、1982年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |



|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 早期臨床試験・臨床薬理学・薬物動態学   |
| 研究キーワード            | 医薬品開発・臨床試験・品質管理・ドラッグリポジショニング   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>アンメットメディカルニーズに対する医薬品開発として、ドラッグリポジショニング研究を行っている。また、人を対象とした早期臨床試験（First In Human試験、PK/PD試験、POC試験まで）の推進として、臨床試験の実施体制構築、品質管理、研究者教育に取り組んでいる。</p> <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Susutlertpanya W, *Wakuda H, Otani N, Kuramoto T, Li L, <u>Kuranari M</u>, Sekiguchi A, Kudo H, Uchida T, Imai H, Uemura N. Histological evaluation of nintedanib in non-alcoholic steatohepatitis mice. Life sciences 228: 251-257, 2019.</li> <li>Otani N, Wakuda H, Imai H, <u>Kuranari M</u>, Ishii Y, Ito Y, Okubo A, Ogawa O, Takeda K, Ohyama T, Hasunuma T, *Uemura N. No Effect of Digoxin on Rosuvastatin Pharmacokinetics in Healthy Subjects: Utility of Oita Combination for Clinical Drug-Drug Interaction Study. Clinical and translational science. 12(5): 513-518, 2019.</li> </ol> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院歯科口腔外科・助教  |  |
| 氏名     | 栗林 佳奈 (Kuribayashi Kana)  |   |
| 取得学位   | 学士（歯学）、福岡歯科大学、2012年3月   |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 歯学   |
| 研究キーワード            | 口腔外科、口腔内科  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>研究内容：<br/>骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の治療に関する臨床的検討<br/>口腔顎顔面の発育異常とその治療</p> <p>研究業績：<br/>薬剤関連顎骨壊死の治療に関する臨床的検討. 第83回日本口腔外科学会九州地方会<br/>抜歯窩に骨壊死または治癒遅延を生じたBP内服患者の2症例. 第24回日本口腔内科学会・第27回日本口腔診断学会<br/>大分大学医学部附属病院の口唇口蓋裂診療体制と過去33年間の臨床統計. 第43回日本口蓋裂学会総会・学術集会</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院集中治療部・助教   |  |
| 氏名     | 栗林 由英 (Kuribayashi Yoshihide)   |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2011年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

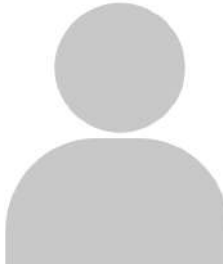

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 麻酔科学, 集中治療医学  |
| 研究キーワード            | せん妄, 酸化ストレス   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>「周術期における酸化ストレスと術後せん妄の関連」についての研究</p> <p>・敗血症と酸化ストレスの関連性, 一般外科術後と酸化ストレスの関連性について臨床研究継続中である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>「<math>\beta</math>遮断薬ランジオール塩酸塩の抗酸化能—電子スピン共鳴法/TBARS分析によるin vitro/ex vivoラジカル消去能の測定—」<br/>日本麻酔科学会第63回学術集会 (2016年) で発表</li> <li>「心臓血管外科手術における術後せん妄と酸化ストレスの関連」<br/>日本麻酔科学会第65回学術集会 (2018年) で発表</li> <li>「心臓・大血管疾患に対する待機的手術における術後譫妄とビタミンCの関連/-電子スピン共鳴装置を用いた検討-」<br/>日本麻酔科学会第68回学術集会(2021年)で発表</li> <li>「待機的心臓・大血管手術における高齢者術後譫妄には酸化ストレスが関与する/-電子スピン共鳴装置を用いた検討-」<br/>第33回日本老年麻酔学会(2021年)で発表, <u>優秀演題賞受賞</u></li> </ol> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救命救急センター (消化器・小児外科)・助教   |  |
| 氏名     | 河野 洋平 (Kono Yohei)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2012年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 消化器外科学   |
| 研究キーワード            | 外科侵襲 癌治療 抗癌剤脱毛   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>・抗酸化剤を用いた抗癌剤副作用、外科侵襲に対する対策に関する研究</p> <p>抗癌剤の副作用の1つである脱毛には頭皮における毛包周囲環境にて起こる酸化ストレスやアポトーシスが関与しており、抗酸化治療は有効な脱毛対策となる。われわれは強力な抗酸化物質<math>\alpha</math>リポ酸誘導体を用いて酸化ストレスを制御し、脱毛を予防する研究を行っている(The utility of DHL-HisZnNa, a novel antioxidant, against anticancer agent-induced alopecia in breast cancer patients: a multicenter phase II clinical trial. <i>Breast Cancer Res Treat.</i> 2019 ;176(3):625-630)。また、消化器外科領域における腹膜炎や続発する敗血症病態においては酸化ストレスによる臓器障害が問題となり、同様に抗酸化物質は臓器障害を軽減する治療となりうるため、これを制御する治療の開発を行っている(A newly synthetic vitamin E derivative, E-Ant-S-GS, attenuates lung injury caused by cecal ligation and puncture-induced sepsis in rats. <i>Surgery.</i> 2012;151(3):420-6)。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院麻酔科・助教   |  |
| 氏名     | 小坂 麻里子 (Kosaka Mariko)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2011年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 麻酔科学  |
| 研究キーワード            | 炎症 麻酔   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>・ 緑色波長光照射による血小板シグナルを介した肺保護効果の検討</p> <p>本研究は、マウス敗血症モデルに対して光治療を行った際に、血小板関連因子が抗炎症効果に与える影響について検討することを目的としている。我々はこれまでの実験で、自然光を模したLED光照射が照度依存性に抗炎症効果を有し、肺傷害を軽減することを見出した。また、各種波長光を用いて同様の光照射実験を行い、緑色波長光で炎症性サイトカインの抑制と抗炎症サイトカインの増加を認め、光依存性に変動した遺伝子のうち約40%が血小板関連遺伝子であることを発見した。現在、盲腸結紮穿刺 (CLP) による敗血症モデルを作成し、緑色LED光の肺保護効果と上記血小板関連遺伝子の関連、および役割について検討を行っている。</p> <p>(research map: <a href="https://researchmap.jp/mkosa">https://researchmap.jp/mkosa</a>)</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院心臓血管外科・助教  |  |
| 氏名     | 小崎 智史 (Kozaki Satoshi)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分医科大学、2009年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 心臓血管外科学  |
| 研究キーワード            | 成人心臓外科手術、血管外科手術  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>成人心臓外科手術、血管外科手術治療成績向上に関する研究</p> <p>急性大動脈解離術後の下行大動脈残存解離に対するステントグラフト内挿術の治療成績に関する研究</p> <p>-A型急性大動脈解離に対して手術を行った患者さんの解離残存血管拡大による解離性大動脈瘤に対して、胸部ステントグラフト内挿術による治療成績を他施設と共同で後方視的に検討しています。</p> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部


医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部




その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院医療情報部・助教   |  |
| 氏名     | 後藤 芳美 (Gotou Yoshimi)   |   |
| 取得学位   | 修士 (看護学)、大分大学、2011年3月   |   |
| SDGs目標 | <br>17 パートナーシップで<br>目標を達成しよう |   |




|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 医療情報学   |
| 研究キーワード            | 電子カルテ、病院情報システム、看護   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>主に電子カルテで蓄積した情報を用いて、病院職員からの要求を元に業者では開発できないニッチなシステムを研究し、日本医療情報学会にて発表している。</p> <p>看護管理に有用な情報を提供するシステムの構築に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>看護業務の数量化の探索</li> <li>DWHを用いた看護業務の可視化の検討</li> <li>業務量調査結果との比較による評価</li> <li>看護師の忙しさの要因を追求するシステムの開発</li> <li>看護必要度C項目評価のための情報収集機能の開発</li> <li>電子カルテを用いたPNSワークシートの構築</li> <li>ケアプロセスの可視化 (第一報)</li> <li>転倒転落アセスメントスコアとベッドマップ機能の融合システムの構築</li> <li>薬剤部門の電子カルテ情報収集のための自作システム開発</li> <li>病院内部署の個別運用業務に応える自作システムとその評価</li> </ul> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院小児科・助教   |  |
| 氏名     | 小林 修 (Kobayashi Osamu)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2010年3月  |   |
| SDGs目標 | <br>3 すべての人に<br>健康と福祉を |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 小児神経学   |
| 研究キーワード            | 神経発達症、早期発見、General Movements、自発運動   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●乳児早期の自発運動評価と神経発達症の早期発見に関する研究</p> <p>神経発達症の早期発見を目的としています。乳児早期のGeneral Movementsという自発運動と、神経発達症との関連性がないかの評価を行います。一般健診を受ける3-4か月時の乳児の自発運動をビデオで評価し、その結果と1歳半、3歳半、5歳時の質問紙や健診結果から、神経発達症の徴候との関連性の検討を行います。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救急救命センター（循環器内科）・助教   |  |
| 氏名     | 齋藤 聖多郎 (Saito Shotaro)  |   |
| 取得学位   | 博士（医学）、大分大学、2015年3月   |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 循環器内科学  |
| 研究キーワード            | 心不全、糖尿病、肥満、心房細動、心筋虚血再灌流障害、心筋症   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <ul style="list-style-type: none"> <li>・糖尿病ラットにおける血糖変動と心房筋線維化増悪、心房細動易誘発性に関する研究(Saito S, Takahashi N, et al. Glucose fluctuations increase the incidence of atrial fibrillation in diabetic rats. Cardiovasc Res. 2014 Oct 1;104(1):5-14).</li> <li>・糖尿病ラットにおける血糖変動と心筋虚血再灌流障害増悪に関する研究(Saito S, Takahashi N, et al. Glucose Fluctuations Aggravate Cardiac Susceptibility to Ischemia/Reperfusion Injury by Modulating MicroRNAs Expression. Circ J. 2016;80(1):186-95).</li> <li>・ヒト心外膜脂肪中の炎症性サイトカイン含量と隣接する心房筋線維化との関わり(Abe I, Saito S, Takahashi N, et al. Association of fibrotic remodeling and cytokines/chemokines content in epicardial adipose tissue with atrial myocardial fibrosis in patients with atrial fibrillation. Heart Rhythm. 2018 Nov;15(11):1717-1727).</li> </ul> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救急救命センター・助教  |  |
| 氏名     | 坂本 智則 (Sakamoto Tomonori)   |   |
| 取得学位   | 修士（医科学）、大分大学、2012年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

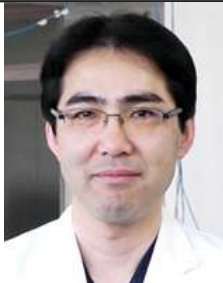

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 整形外科   |
| 研究キーワード            | 骨癒合 手外科  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>私の専門は、整形外科、手外科・Hand surgeryです。現在は2つの研究を並行して行っています。1つ目は幼児を対象とした母指中手指節関節過伸展症の解剖学的・形態機能学的要因の調査で、静岡大学との共同研究をおこなっています。お子さんの中には母指が過伸展してしまう子が一定数いらっしゃいますが、原因はよくわかっていません。ハサミが使いにくかったり、将来的に疼痛が出たりすることがあります。その原因究明と対策を研究しています。2つ目は、ラットを用いた骨癒合の研究をおこなっています。難治性骨折モデルを作成して、どうすれば骨折した骨がよりつくようになるのかを研究しています。現在はいろいろな薬剤を直接骨に投与して、経過を見るということを構想し、実践しています。研究結果がうまくいけば今まで治せなかったような複雑な骨折も直せるようになるかもしれないという信念で研究しています。</p> |

## 医学部附属病院

|                    |  |   |
|--------------------|--|---|
| 所属・職位              | 医学部附属病院脳神経内科・助教  |  |
| 氏名                 | 軸丸 美香 (Jikumaru Mika)  |   |
| 取得学位               | 医学博士 (基礎医科学)、大阪市立大学、2010年3月  |   |
| SDGs目標             |     |   |
| 研究分野               | 神経内科学・生化学  |   |
| 研究キーワード            | 老化・活性酸素・代謝・性差  |   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>1. 性差と代謝に関する検討 (大阪市立大学)</p> <p>2007-2009: 21世紀COEプログラム、疲労克服研究拠点の形成 奨励研究</p> <p>2009: Young Investigator's Award of Society for Free Radical Research Asia</p> <p>2010: 住友生命社会福祉事業団 海外研究助成</p> <p>2018: 第11回日本性差医学・医療学会学術集会 最優秀演題賞</p> <p>2. アルツハイマー病とエストロゲンレセプターとの関連の検討(スペイン・バレンシア大学)</p> <p>3. アルツハイマー病を含む認知症患者の徘徊に関する研究(大分大学)</p> <p>リストバンド型ウェアラブル端末によるバイタルデータの遠隔モニタリングシステム開発と医療施設への導入.新医療,11月号,118-121. 2018</p> |   |

|                    |  |   |
|--------------------|--|---|
| 所属・職位              | 医学部附属病院歯科口腔外科・助教   |  |
| 氏名                 | 篠田 茉央 (Shinoda Mao)  |   |
| 取得学位               | 学士 (歯学)、東京歯科大学、2018年3月   |   |
| SDGs目標             |   |   |
| 研究分野               | 歯科口腔外科・臨床研究  |   |
| 研究キーワード            | 顎欠損、再建、顎補綴、インプラント  |   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>研究内容：顎欠損患者の審美的・機能的回復法の検討</p> <p>研究業績：Oral Science Internationalへの論文掲載</p> <p>“Extralingival peripheral ameloblastoma arising in the infratemporal fossa: A case report with an assessment of proliferative activity”</p> <p>：口腔外科学会総会での学会発表</p> <p>“骨性再建を行った上顎腫瘍の2例”</p> <p>アピールポイント：現在、上下顎骨再建患者の咬合回復法について臨床研究をおこなっている最中です。</p> |   |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院循環器内科・助教   |  |
| 氏名     | 篠原 徹二 (Shinohara Tetsuji)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2004年12月   |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 不整脈、洞結節機能、心臓突然死   |
| 研究キーワード            | ブルガダ症候群、洞不全症候群、自律神経   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>心臓突然死を含めて、不整脈疾患の治療に関する研究を精力的に行っている。中でも特発性心室細動のJ波症候群に関する臨床研究に力を注いでいる。代表的な論文として、薬物負荷を行うことでJ波症候群患者における薬物によるJ波の変動を2006年に世界で初めて報告した (Heart Rhythm 3, 1082-4, 2006)。そして、大分大学循環器内科におけるJ波症候群患者に対する薬物治療成績結果をまとめ (Heart Rhythm, 11, 1441-5, 2014)、この業績から2015年10月に第5回大分大学医学部中塚医学賞を受賞した。その後もこれまで臨床研究を継続し、最近も以下の論文報告している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Shinohara T, et al. Ann Noninvasive Electrocardiol. 2021; 26: e12831.</li> <li>2) Shinohara T, et al. J Arrhythm. 2021; 37: 70-78.</li> <li>3) Shinohara T, et al. J Cardiovasc Electrophysiol. 2021;32:507-514.</li> <li>4) Shinohara T, et al. Ann Noninvasive Electrocardiol. 2022:e12937.</li> <li>5) Shinohara T, et al. Circ J. 2022;86:280-286.</li> </ol> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・助教   |  |
| 氏名     | 篠原 麻由香 (Shinohara Mayuka)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2017年6月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 泌尿器科   |
| 研究キーワード            | 尿失禁、加齢、ヒト外尿道括約筋  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>加齢に伴う尿失禁に関する研究</p> <p>尿失禁は加齢に伴って増加し、高齢者の生活の質を低下させ、また介護者の負担を増加させる。外尿道括約筋は、尿失禁を防止する機能をもった横紋筋であるが、加齢とともに減少することが明らかにされており、その機序解明と有効な治療の探索は課題である。我々は世界で初めて樹立した不死化ヒト外尿道括約筋幹細胞を用いて、増殖/抑制因子、アポトーシスや分化におけるシグナル伝達機構を明らかにしてきた。今後も他の横紋筋との差異、個体差、性差に注目して研究を行っていき、尿失禁の新規治療法の開発を目指したい。</p> |

## 医学部附属病院

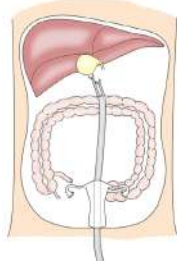
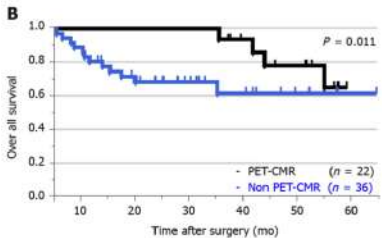
|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・助教   |  |
| 氏名     | 澁谷 忠正 (Shibuya Tadamasu)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2008年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 腫瘍免疫学   |
| 研究キーワード            | 抗体、腫瘍免疫   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>大学院時代はヒト型Fab抗体作成の研究を行っていました。</p> <p>泌尿器科領域では特に悪性腫瘍（がん）に対する治療に力を入れています。</p> <p>多くの抗体医薬品が登場し、中でも免疫チェックポイント阻害薬の登場はがん治療に変革をもたらしました。</p> <p>抗体治療薬及び腫瘍免疫の研究を通じて、泌尿器がん領域の治療躍進に貢献したいと思っています。</p> <p>Identification of a human monoclonal Fab with neutralizing activity against H3N2 influenza A strain from a newly constructed human Fab library. <i>Microbiol Immunol</i> 2008; 52: 162-170</p> |

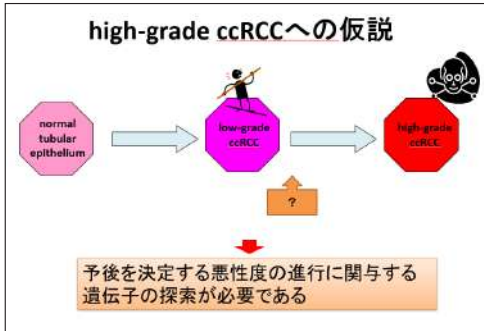
|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院脳神経外科・助教   |  |
| 氏名     | 杉田 憲司 (Sugita Kenji)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分医科大学、2001年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 脳血管障害   |
| 研究キーワード            | 脳梗塞モデル、フリーラジカル、認知機能障害、ESR装置   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>脳虚血の病態解明および分子生物学的検索技術の習得を基礎に、脳梗塞動物モデル等を用いて電磁ホーン型ESR装置を用いたフリーラジカルイメージングの技術確立を試みている（2016年度科学研究費）。脳卒中、アルツハイマー病における認知機能障害にターゲットを定め、フリーラジカルの関与に対し、電磁ホーン型ESRイメージング装置による非侵襲的測定を確立させ、病態、進行度、治療に対する反応などに応用すべく基礎研究を行っている。臨床実用技術として必須である『測定の再現性と特異性・定量性』を脳虚血・再灌流モデル、アルツハイマー病モデルの生体の各種パラメーターの測定を用いて検証する。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院消化器外科・助教   |  |
| 氏名     | 鈴木 浩輔 (Suzuki Kosuke)   |   |
| 取得学位   | 医学博士 (病態制御医学)、大分大学、2011年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |


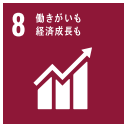
|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 消化管外科学／腫瘍学 内視鏡外科学   |
| 研究キーワード            | 内視鏡手術、胃癌、食道癌  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 体表に傷がない、新しい内視鏡手術の研究<br/>内視鏡を口や肛門などの自然孔を経由して体腔内に挿入し、体表に傷を作ることなく体腔内の手術を行う経管腔的内視鏡手術 (NOTES) の研究を行い、NOTESが生体に及ぼす影響を報告した (Suzuki K. et al. Gastrointest Endosc 2011).</li> <li>● 胸部食道癌の治療戦略決定におけるPET/CTの有用性<br/>胸部食道癌に対し術前化学療法の前後でPET/CT評価を行い、PET/CTによるPET-CMR (完全奏効) が予後因子となり得るか報告した (Suzuki K. et al. World J Clin Oncol 2021).</li> </ul>   |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院腎臓外科・泌尿器科・助教   |  |
| 氏名     | 高橋 美香 (Takahashi Mika)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2016年6月  |   |
| SDGs目標 |  |   |



|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 医学 泌尿器科学   |
| 研究キーワード            | 泌尿器科 腎臓癌   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>腎臓癌の悪性化にかかわる染色体欠損部位を同定し、悪性度の強い腎臓癌に共通して認められる部位について研究した。その中の遺伝子が欠損することで、発現の低下する蛋白について検討を行った。その発現が低下している一つの遺伝子を腎癌細胞へ導入し蛋白発現を増加させることで、腎癌細胞の増殖は抑制されることが分かった。その抑制の原因として腎癌細胞のアポトーシスを引き起こしていることを突き止めた。<br/>Mika Takahashi et. al. Cancer Sci. 2016 Apr;107(4):417-23</p>  |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科・助教   |  |
| 氏名     | 立山 香織 (Tateyama Kaori)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2017年9月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 耳鼻咽喉科学   |
| 研究キーワード            | 自己免疫性中耳炎、ANCA関連血管炎   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>「ANCA関連血管炎の早期診断法の確立と中耳炎発症機構の解析」をテーマに科学研究費若手研究B (2016~2017年)、「ANCA関連血管炎性中耳炎発症トリガーとなる中耳感染の関与とサイトカインの解析」をテーマとして若手研究 (2018~2019年) を獲得のもと、研究成果を報告した (Tateyama K, Kodama S, Kishibe K, et al. A novel strategy with combined assays for detection of anti-neutrophil cytoplasmic antibody (ANCA) in clinically ANCA-negative granulomatosis with polyangiitis patients. <i>Auris Nasus Larynx</i>. 2017;44:735-741.). 日本耳科学会、ANCA関連血管炎性中耳炎ワーキンググループの共同研究グループの活動の中では、診療の手引きや研究論文を作成した。2018年にはANCA関連血管炎性中耳炎に関する臨床論文 (立山香織、他: ANCA関連血管炎性中耳炎の寛解導入治療後の聴力経過. <i>Otol Jpn</i> 28, 19-24, 2018) で第24回耳科学会奨励賞を受賞。「ANCA関連血管炎性中耳炎の中耳貯留液を用いた早期診断法の開発」をテーマに基盤研究C (2021~2023年) を獲得し研究継続中。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院眼科・助教  |  |
| 氏名     | 田村 弘一郎 (Tamura Koichiro)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2005年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 神経眼科、網膜硝子体  |
| 研究キーワード            | 斜視、視神経  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>斜視、視神経疾患の病態解明と治療<br/>         大学でしか診断、治療できない神経眼科疾患症例を蓄積し、新たな治療法を検討、実施する</p> <p>片頭痛に伴い再発を繰り返す網膜動脈閉塞症の1例<br/> <i>神経眼科</i> 37巻1号 45-50 2020 査読有</p> <p>【間違いやすく、鑑別が重要な神経眼科疾患】<br/>         うっ血乳頭と偽性うっ血乳頭(解説/特集)<br/> <i>眼科グラフィック</i> Vol9 434-442 メディカ出版 2020査読有</p> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救命救急センター・助教  |  |
| 氏名     | 塚本 菜穂 (Tsukamoto Nao)   |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2015年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 救急医学  |
| 研究キーワード            | 病院前医学、心肺蘇生、集中治療   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | 心肺停止後の低酸素脳症に対する体温管理療法に関する研究<br><br>心停止後の低酸素脳症に対する体温管理療法の可否については、現在も研究が続いており、議論されている分野である。当院における低酸素脳症、体温管理療法の症例に対し、後方視的に分析を行っていく。また他施設の共同研究にも積極的に参加し、当院における体温管理療法について研究していく。 |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院腎臓内科・助教  |  |
| 氏名     | 中田 健 (Nakata Takeshi)   |   |
| 取得学位   | 修士 (医学)、大分医科大学、2001年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 腎臓内科領域、血液透析分野、臨床研究疫学  |
| 研究キーワード            | 血液透析、ベイズ統計、リアルワールドデータ解析、AIの臨床応用   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | ①腎臓領域における腎生検病理の採取糸球体個数の適正判別におけるベイズの定理の応用。<br>②血液透析の診療プラクティスパターンにおけるアンケート調査、全国医学部附属病院血液浄化部門連絡協議会の運営委員として活動及び研究を行っている。<br>③大分大学医学部附属病院 女性医療人キャリア支援センター 副センター長および、医療人パパの会ペンギンズの発起人として、働く女性医療人の労働環境の支援及び男性医療人の育休取得活動のキャンペーンを率先して行っている。<br>④DPCデータ、レセプトデータを用いたリアルワールドデータに基づく、急性期病院の血液透析患者のプラクティスパターンの研究を行っている。<br>⑤学生教育にも従事し、2017年から継続して「もう一度講義を受けたい教員」に選出されている。<br>(research map) <a href="https://researchmap.jp/nakata-7">https://researchmap.jp/nakata-7</a> |

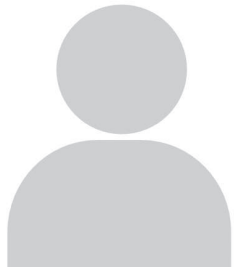

## 医学部附属病院

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院眼科・助教  |  |
| 氏名     | 中野 聡子 (Nakano Satoko)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2014年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |





|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 眼科学   |
| 研究キーワード            | 眼感染症、PCR  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>眼感染症多項目PCR検査薬の創出と普及がテーマである。</p> <p>I 新しい眼感染症多項目PCR検査薬の創出<br/>核酸精製不要・検体直接PCR、マルチプレックス・リアルタイムPCR、凍結乾燥・固相化技術で構成された多項目PCR検査薬を創出した (Ophthalmology. 2020)。</p> <p>II PCR適応の体系化<br/>海外を含む多施設研究 (約1200例) にて、各感染症の病原体コピー数の分布を解明し、眼感染症PCR検査の適切な使用法を体系化した (Am J Ophthalmol. 2019)。</p> <p>III 眼感染症PCR需要調査・先進医療・外注検査の導入支援<br/>全国調査 (高瀬, 中野ら. 日眼会誌. 2019) を実施し、全国100施設超に普及させた。</p> <p>IV 橋渡し研究・保険診療化の働きかけ<br/>アカデミアでPMDA対応、臨床性能試験を準備し、保険診療化を目指している。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院消化器外科・助教   |  |
| 氏名     | 二宮 繁生 (Ninomiya Shigeo)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2009年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 消化管外科   |
| 研究キーワード            | 消化管外科   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>(研究実績) 2005年4月より大分大学大学院医学系研究科博士課程に進み、消化管外科に関する基礎研究に取り組んできた。特に胃癌に対する血管新生に関する研究を行い、学位を取得した。学位取得は消化管外科に関する臨床研究を行い、学会発表や論文発表を行ってきた。</p> <p>(診療実績) 学位取得後は、有田胃腸病院、臼杵市医師会立コスモス病院などの施設にて外科全般の診療を行ってきた。2020年4月より大分大学医学部高度救命救急センター助教、同8月より大分大学消化器・小児外科助教 (2021年10月より学内講師) として診療に従事している。また日本外科学会専門医・指導医、日本消化器外科学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医として臨床に従事している。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院感染制御部・助教   |  |
| 氏名     | 橋本 武博 (Hashimoto Takehiro)  |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2010年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 感染症学   |
| 研究キーワード            | SFTS、バクテロイデス   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>・大分県内生息動物とダニの包括的な重症熱性血小板減少症候群ウイルス(SFTSV)および抗SVTSV抗体の分布調査<br/>2020年より大分県におけるSFTSの疫学分布調査を行い、県内におけるSFTS感染リスクについて評価を行い、リスクの高い地域を明確にした。<br/>Hashimoto T, Yahiro T, Yamada K, Kimitsuki K, Okuyama MW, Honda A, Kato M, Narimatsu H, Hiramatsu K, Nishizono A. Distribution of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus and Antiviral Antibodies in Wild and Domestic Animals in Oita Prefecture, Japan. Am J Trop Med Hyg. 2022 Feb 28:tpmd211130.</p> <p>・バクテロイデスの耐性遺伝子保有率の調査<br/>Bacteroides 属菌は腹腔内感染症、術後創感染などの原因菌として重要であり、各種抗菌薬に対する耐性化も注目されている。<i>Bacteroides fragilis</i> の薬剤感受性および耐性遺伝子保有状況について検討を行っている。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院整形外科・助教  |  |
| 氏名     | 平川 雅士 (Hirakawa Masashi)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2019年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 整形外科  |
| 研究キーワード            | 膝関節疾患、人工膝関節   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>・人工膝関節置換術に関する研究<br/>人工膝関節置換術における術中の問題点など3D画像を用いたシミュレーション (Evaluation of the rotational alignment of the tibial component in total knee arthroplasty: position prioritizing maximum coverage, European Journal of Orthopaedic Surgery &amp; Traumatology, 27-1, 2017)<br/>アジア人向け人工膝関節の開発と臨床応用</p> <p>・前十字靭帯損傷、半月板損傷に関する研究<br/>手術用デバイスの開発、臨床応用、臨床成績の評価</p> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院皮膚科・助教   |  |
| 氏名     | 広瀬 晴奈 (Hirose Haruna)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2020年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 皮膚科学   |
| 研究キーワード            | アトピー性皮膚炎、皮膚免疫、Wnt/beta-cateninシグナル   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>①炎症性皮膚疾患の病態形成に関わる抗菌ペプチドmBD14の発現制御機構の解明</p> <p>◆組織特異的 TRAF6 欠損マウスに S.aureus を感染させ mBD14 誘導能を明らかにする抗菌ペプチドmBD14(=hBD3)の誘導メカニズムと、mBD14と皮膚炎の相関性を生体レベルで明らかにし、アトピー性皮膚炎の増悪機序に新たな知見を加えることができ、hBD3の発現を制御する皮膚局所へのサイトカイン補充療法やIL-4中和抗体投与療法が実現する可能性も期待できる。</p> <p>②Wnt/beta-catenin/CBPシグナル経路に着目したアトピー性皮膚炎の病態解明</p> <p>◆Wnt/beta-catenin/CBPシグナルの阻害剤である化合物ICG-001による湿疹惹起抑制機序の解明<br/>現在、アトピー性皮膚炎において次々と経口低分子化合物JAK阻害剤が認可されている。そこで、Wnt/beta-catenin/CBPシグナル経路に着目し、Wnt/beta-catenin/CBPシグナルの阻害剤である低分子化合物ICG-001を用いて解析することで、アトピー性皮膚炎の発症予防、治療の可能性が期待できる。</p> |

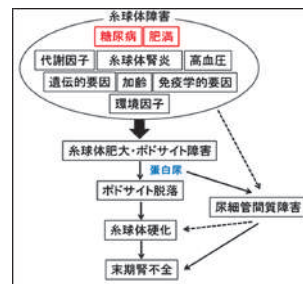
|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院循環器内科・助教   |  |
| 氏名     | 福井 暁 (Fukui Akira)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2017年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

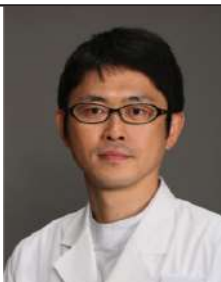


|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 医学  |
| 研究キーワード            | 不整脈、心房細動、心房線維化、心不全  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>循環器内科の中でも、主に不整脈学を研究しています。</p> <p>基礎研究では、アディポサイトカインであるレプチンが炎症を介して心房線維化が進行することや (Circ Arrhythm Electrophysiol. 2013; 6:402-9.)、肥満による高レプチン血症が心房線維化を進行させることを発見しました (J Cardiovasc Electrophysiol. 2017; 28:702-710.)。現在も線維化進行のメカニズムについて研究しています (科研研究課題20K20225)。</p> <p>臨床研究では、心房細動に対するカテーテルアブレーションが、心収縮能が保たれた心不全 (Heart Failure with Preserved Ejection Fraction, HFpEF) 患者の再入院を減少させることを世界で初めて報告しました (J Cardiovasc Electrophysiol. 2020; 31:682-688.)。</p> <p>今後も、基礎研究および臨床研究を通じて、社会の発展に貢献できればと思います。</p> |



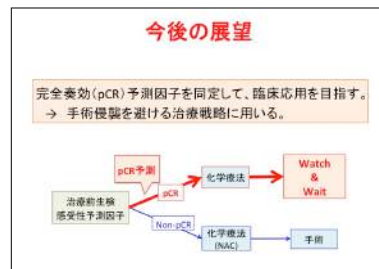
|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院腎臓内科・助教  |  |
| 氏名     | 福田 顕弘 (Fukuda Akihiro)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、宮崎大学、2011年11月   |   |
| SDGs目標 |    |   |



|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 腎臓内科学   |
| 研究キーワード            | 尿沈渣中ポドサイトmRNA、バイオマーカー、糖尿病性腎症、肥満関連腎症   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●生活習慣病における尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量の有用性の検討</p> <p>糖尿病を主体とした生活習慣病患者の数は増え続け、患者の生活の質の維持や医療経済上も深刻な問題となっている。糖尿病や肥満関連腎症では早期診断に微量アルブミン尿が用いられるが、微量アルブミン尿の多寡が糸球体障害と相関しない例も多く、微量アルブミン尿より精度の高い早期診断法の開発が求められている。多くの糸球体疾患ではポドサイト障害の持続に伴うポドサイトの脱落が糸球体硬化の主な原因である(図)。私はこれまでに尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量が糸球体疾患の有用なバイオマーカーであることを報告した(Kidney Int 2012, Nephrol Dial Transplant 2012,2015,2017, Clin Exp Nephrol 2020, Kidney360 2022)。さらに、糖尿病や肥満関連性腎症では早期より糸球体肥大・ポドサイト障害を認め、尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量がアルブミン尿より早期、予後予測可能なバイオマーカーであることを報告した(Sci Rep 2019,2020)。本研究は非侵襲的な尿検体を用い腎疾患の新規バイオマーカーを探索する研究である。※<a href="https://www.ico.oita-u.ac.jp/seeds/seeds.php?no=38">https://www.ico.oita-u.ac.jp/seeds/seeds.php?no=38</a></p> |





|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院高度救命救急センター (消化器・小児外科)・助教   |  |
| 氏名     | 藤島 紀 (Fujishima Hajime)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2018年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 消化管  |
| 研究キーワード            | 食道癌、化学療法、感受性   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>・食道癌に対する術前化学療法 (DCF; Docetaxel/Cisplatin/5-Fluorouracil) の治療効果を予測因子の同定</p> <p>近年、局所進行食道癌に対しては術前DCF療法が行われている。JCOG1109試験にて術前DCF療法の効果は示され、今後標準治療として推奨されると思われる。</p> <p>我々は、局所進行食道癌に対する術前DCF療法の治療効果を予測しうる因子を、術前生検組織を用いて判定する研究を行ってきた。今までに術前生検組織を用いたDNAマイクロアレイによる網羅的遺伝子解析を行い、感受性を予測しうる候補分子の同定をした (*論文1)。</p> <p>今後、化学療法の感受性を予測することで、個別化医療に繋がっていきたい。</p> <p>*論文1: Fujishima H, Fumoto S, Shibata T, et al. A 17-molecule set as a predictor of complete response to neoadjuvant chemotherapy with docetaxel, cisplatin, and 5-fluorouracil in esophageal cancer. PlosOne 2017</p> |



|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院小児科・助教   |  |
| 氏名     | 前田 美和子 (Maeda Miwako)   |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分医科大学、1995年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

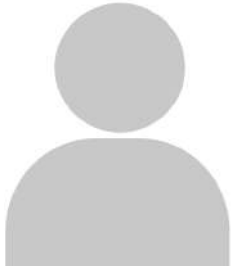

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 小児内分泌学   |
| 研究キーワード            | 肥満、脂質異常  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●小児の肥満と脂質異常の長期免学調査研究</p> <p>大分市の小児生活習慣病予防検診のデータを用いて、小学5年生の肥満発生率や脂質異常の発生率を解析し、小児期からの生活習慣病予防対策を検討しています。</p> <p>(関連する論文 Secular Trends in Obesity and Serum Lipid Values among Children in Oita City, Japan, during a 27-Year Period. Maeda M, Maeda T, Ihara K. J Atheroscler Thromb. 2022 Jan 29. doi: 10.5551/jat.63056. Online ahead of print. PMID: 35095055)</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院消化器外科・助教   |  |
| 氏名     | 増田 崇 (Masuda Takashi)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2012年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 肝胆膵外科  |
| 研究キーワード            | 肝胆膵外科  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>(研究実績) 2008年4月より大分大学大学院医学系研究科博士課程に進み、肝胆膵外科・肥満外科に関する基礎的研究に取り組んできた。肝臓外科手術の際に重篤な合併症を引き起こす可能性のある虚血再灌流障害に関する研究を行い、学位を取得した。学位取得後は、肝臓癌や肝臓外科に関する臨床的研究を行い、学会報告を行ってきた。現在、今回成果を発表する全国規模の多施設共同研究を主導的に行っている。</p> <p>(診療実績) 津久見中央病院、大分赤十字病院、別府医療センターなどの地域の基幹病院にて、外科全般の診療を行ってきた。現在は大分大学消化器・小児外科助教として、肝胆膵外科に従事している。肝胆膵外科学会高度技能医、内視鏡外科技術認定医を取得し、高難度肝胆膵外科手術や肝胆膵内視鏡外科手術を行っている。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院放射線科・助教  |  |
| 氏名     | 松本 陽 (Matsumoto Akira)  |   |
| 取得学位   | 医学士、高知医科大学、1991年3月  |   |
| SDGs目標 |    |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 放射線腫瘍学   |
| 研究キーワード            | 放射線治療  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>研究内容</p> <p>1放射線治療における新たな治療方法の開発<br/>前立腺癌術後PSA再発に対する高精度治療の開発および照射線量の確立</p> <p>オリゴ転移に対する定位放射線治療の有用性</p> <p>Dual energy CTを用いた放射線治療の治療精度管理の確立</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院放射線部・助教  |  |
| 氏名     | 丸野 美由希 (Maruno Miyuki)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2019年9月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 画像診断学、画像下治療 (IVR)  |
| 研究キーワード            | 門脈圧亢進症、動静脈奇形、内臓動脈瘤   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>・門脈系IVRに必要な画像解剖、消化管静脈瘤などの門脈圧亢進症に対するIVRの研究 (論文1)。</p> <p>・動静脈奇形の画像診断、動静脈奇形に対するIVRに関する研究 (論文2、3)。</p> <p>【論文】</p> <p>1. Balloon-occluded retrograde transvenous obliteration for isolated gastric varices draining through pericardiophrenic vein without gastrosplenic or gastrocaval shunts. Maruno M, Kiyosue H, Tanoue S, et al. J Vasc Interv Radiol. 2016; 27:203-207</p> <p>2. Where is the origin of the last normal branch from feeding artery of pulmonary arteriovenous malformations? Maruno M, Kiyosue H, Hongo N, et al. Cardiovasc Intervent Radiol. 2018; 12: 1849-1856</p> <p>3. Renal Arteriovenous Shunts: Clinical Features, Imaging Appearance, and Transcatheter Embolization Based on Angioarchitecture. Maruno M, Kiyosue H, Tanoue S, et al. Radiographics. 2016; 36:580-595</p> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院




理工学部


福祉健康科学部



その他学内施設等

|                    |  |   |
|--------------------|--|---|
| 所属・職位              | 医学部附属病院脳神経外科・助教  |  |
| 氏名                 | 勅井 泰朋 (Momii Yasutomo)   |   |
| 取得学位               | 博士 (医学)、大分医科大学、2007年9月   |   |
| SDGs目標             |   |   |
| 研究分野               | 脳腫瘍  |   |
| 研究キーワード            | 悪性神経膠腫 PET検査 画像診断  |   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>PETでの画像解析と組織学的解析を併用した遺伝子プロファイルの可能性</p> <p>脳腫瘍における画像診断及び治療については未だ、有益、有効なものは少ない。そこで新たな画像診断と、それを利用した腫瘍の特性を探ることで、新たな治療を導き出すことを主眼においた研究である。またPET検査の利用価値を上げることで、未だ、保険適応外であるメチオニンPETや低酸素PET等の保険適応を得ることで、多くの患者に負担にならない検査となるよう図っていく。</p> |   |

|                    |  |   |
|--------------------|--|---|
| 所属・職位              | 医学部附属病院脳神経外科・助教  |  |
| 氏名                 | 森重 真毅 (Morishige Masaki)   |   |
| 取得学位               | 博士 (医学)、大分大学、2010年3月   |   |
| SDGs目標             |   |   |
| 研究分野               | 脳神経外科  |   |
| 研究キーワード            | 脳血管障害 脳卒中 脳動静脈奇形 血管新生 分子細胞生物学  |   |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>研究内容：脳血管奇形における細胞内シグナルの解析</p> <p>血管の発生には血管内皮前駆細胞からのvasculogenesisのメカニズムと、血管内皮細胞の形成 (angiogenesis) の過程があり、さらにvascular remodelingが加わる。脳血管奇形の形成にはこれらの異常が関与し、遺伝的要因を背景に、微小環境 (低酸素環境、外傷、炎症、感染等) に導かれる血管新生、免疫細胞の集積、ストローマ細胞の活性化などといったが考えられている。脳血管奇形における分子メカニズムは不明な点が多く、特異的な細胞内シグナルを解明することで、治療困難な脳血管奇形の病勢把握や新たな治療開発に寄与する。また、血管新生の理解は、もやもや病や脳梗塞といった虚血性脳疾患においても非常に重要な知見となる。</p> |   |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院手術部・助教   |  |
| 氏名     | 山本 俊介 (Yamamoto Shunsuke)   |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2012年3月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 区域麻酔、ペインクリニック、超音波医学  |
| 研究キーワード            | 超音波ガイド下末梢神経ブロック、オンライン教育  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>①超音波ガイド下末梢神経ブロックと術後鎮痛に関する研究<br/>②遠隔オンライン技術を駆使した麻酔科診療教育アカデミー (大分大学BURST支援)</p> <p>写真：動画配信セミナーの様子 (研究テーマ②)<br/>臨床における超音波ガイド下末梢神経ブロックを各手術術式にわたって試行し、その有用性についての検討をすすめ、一部、ペインクリニック外来での慢性疼痛患者に対しても応用している。得られた技術は、オンライン技術を駆使して全国へ発信、教育にも役立たせている。</p> |
|                    |    |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院呼吸器・感染症内科・助教   |  |
| 氏名     | 横山 敦 (Yokoyama Atsushi)   |   |
| 取得学位   | 学士 (医学)、大分大学、2005年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 呼吸器感染症、びまん性肺疾患  |
| 研究キーワード            | 呼吸器内科学  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>Drug-induced pneumonia possibly associated with temsirolimus.<br/>J Respirology 2007; 1: 558-561</p> <p>An autopsy case of primary intimal sarcoma of the aortic arch.<br/>J Respirology 2013; 2: 641-645</p> <p>A case of IgG4-related lung disease presenting with wandering shadows.<br/>J Respirology 2014; 3: 719-722</p> |

役員

大学院教育学研究科  
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

## 医学部附属病院

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院呼吸器・感染症内科・助教   |  |
| 氏名     | 吉川 裕喜 (Yoshikawa Hiroki)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2021年6月  |   |
| SDGs目標 |   |   |

|                    |   |
|--------------------|---|
| 研究分野               | 医学  |
| 研究キーワード            | 呼吸器、感染症、肺炎、細菌感染、気道炎症  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p>●高齢者肺炎における予後因子に関する研究<br/>         高齢者肺炎の生命予後因子として、体幹を保持してADLに関与する脊柱起立筋 (erector spinae muscles: ESM) に注目しました。高齢者肺炎の入院患者を対象として胸部CTを用いてESMの断面積を評価し、ESMが小さいと死亡率が高まることを証明しました (Yoshikawa H, et al. Quantitative assessment of erector spinae muscles and prognosis in elderly patients with pneumonia. Sci Rep. 2021; 11: 4319. )。</p> <p>●気道炎症においてマクロライド系抗菌薬の抗炎症効果に関する研究<br/>         肺炎の既往のある高齢者を対象とした後ろ向き研究において、マクロライド系抗菌薬の少量長期投与により肺炎再発が抑制されることを示しました (Yoshikawa H, et al. Long-term macrolide antibiotic therapy may prevent the development of pneumonia in the elderly. J Palliat Med. 2014; 17: 749-50)。実験系ではマクロライド系抗菌薬がマウス由来マクロファージ様細胞からの炎症性サイトカインの放出を抑制することを示しました。</p> |

|        |   |   |
|--------|---|---|
| 所属・職位  | 医学部附属病院内分泌・糖尿病内科・助教   |  |
| 氏名     | 吉田 雄一 (Yoshida Yuichi)  |   |
| 取得学位   | 博士 (医学)、大分大学、2019年3月  |   |
| SDGs目標 |  |   |

|                    |  |
|--------------------|--|
| 研究分野               | 内分泌・代謝学  |
| 研究キーワード            | 二次性高血圧、副腎、原発性アルドステロン症、肥満症、糖尿病  |
| 研究内容・研究業績・アピールポイント | <p><b>【臨床研究】</b><br/>         原発性アルドステロン症の診断・重症度判定・治療に関する研究 (英文3)<br/>         高血圧に関するメタアナリシス (英文2)、肥満臨床研究 (英文2)<br/>         高血圧に関する症例報告・レビュー (英文2) 糖尿病に関する研究 (英文3)</p> <p><b>【基礎研究】</b> 肥満ラットに対する肥満外科手術の効果の検討 (英文1)</p> <p><b>【その他】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高血圧・内分泌関連の執筆 (和文29)</li> <li>・大和証券ヘルス財団 2021年度 (第48回) 調査研究助成 受賞</li> <li>・副腎腫瘍取扱い規約 第4版 執筆協力委員</li> <li>・日本高血圧学会 女性高血圧ワーキンググループ SR委員</li> <li>・日本高血圧学会 高血圧治療ガイドライン2019 SR委員</li> </ul> |